

メラニー・クラインにおける「絶滅の恐怖」

楠井玲奈

はじめに

メラニー・クライン(一八八二—一九六〇)は精神分析における一つの流派、対象関係論の土台を作った精神分析家であり、児童分析の草分け的存在である。彼女によって本格的に分析の対象とされるまで、子どもは大人ほど自在に言葉を操ることのできない分析困難な存在であった。クラインはそのような子どもを分析するにあたり、新たな技法であるプレイ・アナリシスを開発した(松木、2021)。それはおもちゃや文房具などの簡素な道具を用意し、子どもと分析家が一对一となる部屋のなかで、子どもの繰り広げる遊びに解釈を与えていくという方法である。また、クラインはそうした子どもの分析を通じて、言葉を持たない乳児の内的世界がどうなっているのかを明らかにした。その理論化にあたり重視したのが乳児と養育者との関係である。クラインは生まれたての乳児であってもその内的世界には養育者という対象が存在し、その対象との関係が子どもの心的発達に大きな影響を及ぼすと考えた。

クラインは一八八二年にオーストリア・ウィーンで誕生した⁽¹⁾。両親と、姉二人兄一人から構成される六人家族の末っ子である。父は正統派ユダヤ教徒であったが、信心深い彼の家族からの反対を押し切っ

て医師を目指していた。その父の影響もあってか、クラインは十六歳の頃すでに医師を志すようになる。⁽³⁾しかしながら翌年にはまたいとことの婚約が決まり、進学への道を諦めざるを得なかった。そうして専業主婦となったクラインは三人の子どもを出産するが、二度目の妊娠期以降たびたびうつ状態に陥るようになる。その治療法をさまざまに模索した結果、精神分析と出会うこととなった。一九一四年、奇しくも第一次世界大戦の開始した年に、当時三十二歳のクラインはシャンドール・フェレンツィによる分析を受け始め、その後早々に自らも精神分析家としての道を志すようになる(Melanie Klein Trust, n.d.-a)。

クラインの抱いた強い意志に反して、その将来は必ずしも前途洋々といえるものではなかった。当時女性の分析家はまだ少数派であつたうえ、医学の基礎訓練を受けていないということがクラインにとって大きな足枷となった。しかし、ここで時代がクラインに味方する。当時の精神分析界では大人の精神構造が明らかになるにつれ、子どもに対する臨床実践の必要性が叫ばれるようになっていた。ここに活路を見出したクラインは、彼女より数年早く児童分析に取り組んでいたヘルミーネ・フーク⁽⁴⁾ヘルムート⁽⁵⁾に続いて臨床実践を開始した。

そのクラインが提唱した不安の概念に「絶滅の恐怖 fear of annihilation」というものがある。それはクラインによれば人間がもっとも早期に味わう不安であり、自らの欲動によって引き起こされ、文字通り絶滅の脅威にさらされるという不安である。クラインがこうした概念を作ったという事実は非常に興味深い。なぜならクラインこそ、それまで主流であったフロイトの唱える欲動中心の精神分析理論に転換点をもたらした人物だからである。フロイトは人間の究極的な活動動機である欲動を見出したが、その欲動は対象と最初から結びついてはいないと述べ(Freud, 1915a)、⁽⁶⁾原初的な発達状態における対象の不在を示唆した。その後もフロイトの理論における対象はただリビードが「流れ込みあるいは流れ出して

ゆく器」(グリーンバーグ、ミッチェル、2014: 81)としての存在に留まっている。エディプス・コンプレックスを例にとってみても、その確立や解消が遺伝によって決められていると述べており(Freud, 1924b)、実際の対人関係的なやり取りが及ぼす影響は重視していないことが分かる(グリーンバーグ、ミッチェル、2014)。そのようなフロイトに対し、クラインの唱える理論は初めから対象ありきという世界観に基づいており、そのために彼女や彼女に学んだ精神分析家らの築きあげた理論は対象関係論と呼ばれるのである。

クラインに学んだハンナ・スィーガルの著作であり、クライン理論の入門書ともいえる『メラニー・クライン入門』(1977)では、絶滅の恐怖は妄想的―分裂的態勢を語る文脈のなかで流れの一部として登場するに留まり、概念として重点を置かれていない。それは後に出版された『クライン派用語事典』(ヒンシエルウッド、2014)や他のクライン理論の解説書においても同じことである。その一方で、スィーガルと同じくクラインの教え子であるウィルフレッド・ビオンによって統合失調症との関連が検討されたり、他にもフランセス・タスティンによって自閉スペクトラム症への応用が試みられたりするなど、臨床実践の場で活用される形で先行研究は積み重ねられている。絶滅の恐怖は、概念それ自体として人々に強烈な印象を残しているわけではないが、地道かつ着実な形で精神分析に発展をもたらしてきた。それにも関わらず、その概念の成立過程についてはこれまで十分な注目が払われてきていない。

本論では、絶滅の恐怖がいかにして誕生したか、その経緯をクラインや彼女に影響を与えた人物の原文に立ち返ることによって明らかにする。その試みのなかで、対象関係論に立脚するクラインがこの概念を純粹に欲動論だけに基づいて主張したのかどうかについても言及する。また、参照する原文に対しては日本語の訳書がすでに出版されていればそれを、なければ今回翻訳したものを併記する。クライン

が論文を書き残した期間は一九二〇年頃から一九六〇年までに遡り、現代と数十年間の隔たりがある。それらを日本語に翻訳した『メラニー・クライン著作集』もまた、彼女の理論が日本に持ち込まれた一九八〇年代に出版されたものがほとんどであるため同じことがいえる。さらにその『メラニー・クライン著作集』は英語版の著作集である“The Writings of Melanie Klein”を翻訳したものであり、ドイツ語の原文を直接翻訳したものではない。以上のことから、本論ではドイツ語の原文と照らし合わせることで既存の日本語訳の見直しを行い、必要に応じて修正を加えている。なお、原文自体が英語で書かれているものについては、英語の原文を参照している。

不安への着目と取り組み

症状を解消する手段としての不安

クラインが次男・エーリッヒの観察結果をまとめ、その論文をハンガリー精神分析協会で発表したのは一九一九年に遡る(Melanie Klein Trust, n.d.a)。それ以降、一九二五年に発表した論文「チックの心因論に関する寄与」に至るまで、クラインの興味は夜驚症や制止といった症状をいかにして解消するかということに向けられていた。そのような臨床実践に励むなかで不安の重要性へ目を向けるようになり、以下のように記している。

Ich möchte nun darauf hinweisen, daß alle diese Hemmungen, ob sie als Hemmungen kenntlich waren oder nicht, vorwiegend den Rückweg über die Angst - und zwar Kastrationsangst - nahmen, und erst mit deren Auflösung ein Fortschritt in der Behebung der Hemmung zu erzielen war. Es ergaben sich mir aus diesen Beobachtungen Einblicke in die Beziehung zwischen Angst und Hemmung, die ich hier näher besprechen will. (Klein, 1923: 223)

私はこうしたすべての制止の例において——それが制止として認められているかいないかは別として——この心理機制とは逆行する作業が不安を通じて、なかでも「去勢不安」を通じて進められることを見るに至っている。つまり、この不安が解消されたとき初めて、何らかの制止の除去作業が進むわけである。こうした観察から私は不安と制止の關係に何がしかの洞察を持つことができたのであった。これからそれを詳細に論じてみよう。(クライン、1983: 92、一部改訳)

このようにクラインは、臨床現場での経験から、症状を解消するためには子どもの持つ不安を取り除くことが有効であると考えるに至った。この頃のクラインにとって不安といえは去勢不安であり、臨床現場で見られる子どもの不安について独自の観点から検証を試みたり、その内実を詳細に書き記したりするなどということは行っていない。

また、不安の発生については以下のフロイトによる文言を自らの論文(Klein, 1923)にそのまま引用している。

Ich sagte, die Verwandlung in Angst, besser: die Abfuhr in der Form von Angst sei das nächste Schicksal der von der Verdrängung betroffenen Libido. (Freud, 1917: 425)

申し上げましたように、抑圧を受けたリビドのさしあたりの運命は、不安へと変換されることより正確には、不安という形で放散されることです。(フロイト、2012: 491、一部改訳)

この時点でのクラインは、不安とはリビドの変換したものであるというフロイトの考えを採用していたのである。

その一方で、臨床実践を始めて間もないこの時期にクラインはフロイトの理論と異なる主張を行っている。そうした主張がフロイトに対する挑戦と受け取られぬように、不安や抑圧、症状形成といった基本的な概念とそれらの関係性について、次のようにフロイトの著作から大量に引用している。

Es schiene also in einem abstrakten Sinne nicht unrichtig zu sagen, daß Symptome überhaupt nur gebildet werden, um der sonst unvermeidlichen Angstentwicklung zu entgegen. (Freud, 1917: 419)

ですから、こう申しても抽象論理としてまちがっていないことになるでしょうが、症状一般はひとえに、さもないければ避けられない不安増長を逃れるためにのみ形成されるということなのです。(フロイト、2012: 483-484)

Wir erinnern uns, daß Motiv und Absicht der Verdrängung nichts anderes als die Vermeidung von Unlust war. Daraus folgt, daß das Schicksal des Affektbetrags der Repräsentanz bei weitem

wichtiger ist als das der Vorstellung, und daß dies über die Beurteilung des Verdrängungsvorganges entscheidet. Gelingt es einer Verdrängung nicht, die Entstehung von Unlustempfindungen oder Angst zu verhüten, so dürfen wir sagen, sie sei mißglückt, wenngleich sie ihr Ziel an dem Vorstellungsanteil erreicht haben mag. (Freud, 1915b: 256)

抑圧の動機と意図は、不快の回避に他ならなかったということを、想い出しておこう。そこから帰結することだが、代表の情動総計の運命が、表象の運命よりもはるかに重大であり、このことが抑圧過程の判断を決定するのである。不快感覚ないし不安の発生を防止することに成功しなかったならば、抑圧がたとえ表象成分のほうでは目的を達することができていたとしても、その抑圧は失敗であったといえよう。(フロイト、2010b: 204、一部改訳)

Es sind bei den Neurosen Prozesse im Gange, welche sich bemühen, diese Angstenwicklung zu binden, und denen dies auch auf verschiedenen Wegen gelingt. (Freud, 1917: 425)

この不安増長を拘束しようという努力の過程が、いろいろな神経症において進行してゆき、この過程がやまやまの道筋をもって成し遂げられるわけです。(フロイト、2012: 491)

Das Schicksal des quantitativen Faktors der Triebrepräsentanz kann ein dreifaches sein, wie uns eine flüchtige Übersicht über die in der Psychoanalyse gemachten Erfahrungen lehrt: Der Trieb wird entweder ganz unterdrückt, so daß man nichts von ihm auffindet, oder er kommt als irgendwie qualitativ gefährdeter Affekt zum Vorschein, oder er wird in Angst verwandelt. (Freud, 1915b: 255-256)

欲動代表の量的因子の運命は、精神分析から学び知ることのできることからをちっと見渡してみれば分かるように、三様でありうる。欲動は、まったく抑え込まれてしまい、もはや何もそれについて見つけ出すことができなくなるか、あるいはどのようにかして質的に色づけられた情動として前景に出てくるか、それとも不安へと変転するかである。(フロイト、2010b: 203)

Wir sind aber in der psychoanalytischen Praxis gewöhnt, von unbewusster Liebe, Haß, Wut usw. zu sprechen und finden selbst die befremdliche Vereinigung “unbewusstes Schuldbewußtsein” oder eine paradoxe “unbewußte Angst” unvermeidlich. (...) In allen Fällen, wo der Verdrängung die Hemmung der Affektentwicklung gelingt, heißen wir die Affekte, die wir im Redressement der Verdrängungsarbeit wieder einsetzen, “unbewußte”. Dem Sprachgebrauch ist also die Konsequenz nicht abzustreiten; es besteht aber im Vergleiche mit der unbewußten Vorstellung der bedeutsame Unterschied, daß die unbewußte Vorstellung nach der Verdrängung als reale Bildung im System Ubw bestehen bleibt, während dem unbewußten Affekt ebendort nur eine Ansatzmöglichkeit, die nicht zur Entfaltung kommen durfte, entspricht. Streng genommen und obwohl der Sprachgebrauch tadellos bleibt, gibt es also keine unbewußten Affekte, wie es unbewußte Vorstellungen gibt. (Freud, 1915c: 276-277)

ところが、精神分析の実践では、われわれは無意識の愛、憎しみ、怒りといったものを口にすることに慣れている。そして、「無意識の罪責意識」というおかしな合成語や、逆説的な「無意識の不安」といったものをも、避けがたいと感じている。(…)いずれの場合にしても、抑圧が情動

たちの増長を制止することに成功しているのであれば、われわれが抑圧の仕事を手直して回復させてゆくことになるそれらの情動を、われわれは「無意識の」情動と呼ぶ。こうして、言語用法については、一貫性のなさをあげつらうわけにはいかない。ただし、無意識の表象と比較して、重要な区別がある。つまり、抑圧の後でも、無意識の表象は、U_{bw}系において現実の形成物として存続しているが、無意識の情動に対応しているのは、U_{bw}系においてさへ単なる可能性としての手掛かりだけであり、それは開陳に至ることはできない。厳密な言い方をすれば、無意識の表象が存在するようには、無意識の情動は存在しないのである。(フロイト、2010c: 225-226)

ここでのクラインによる主張の組み立て方はいささか論理的でない部分も見受けられるが、以下の点をフロイトの引用から示すことで、これから自身が主張する内容の基盤にしようとしている。まず、あらゆる症状形成・抑圧の裏側には不安の萌芽があること、次に、抑圧によっても抑えきれなかった欲動は不安へと転ずる可能性があること、そしてそのようにして発生した不安は無意識下で潜在的な素質として存在しつづけることの三点である。これらをもとにしたクラインの主張とは次のようなものである。

Wir wissen, daß die Verdrängung ganz besonders stark unter der Wirkung des Ödipuskomplexes einsetzt und dabei Kastrationsangst frei wird. Es wäre wohl auch anzunehmen, daß die auf Grund früherer Verdrängungen eventuell nur als Ansatzmöglichkeiten vorhandene Angst, - die vielleicht auf Grund der Urkastrationen gleich als Kastrationsangst wirksam war, - diesen großen Angstschub verstärkt. (...) Es scheint naheliegend, daß wir den im Alter von 2-3 Jahren auftretenden Pavor

nocturnus als die Angst ansehen können, die als erstes Stadium der Verdrängung des Ödipuskomplexes frei wird, und deren Bindung und Abfuhr dann verschiedenartig erfolgt. / Die bei der Verdrängung des Ödipuskomplexes freierwerdende Kastrationsangst wendet sich nun gegen die schon früher libidinös besetzten Ich-Strebungen und wird nun ihrerseits durch diese Besetzung gebunden und abgeführt. / Es scheint mir sehr einleuchtend, daß je reicher quantitativ und qualitativ die bis dahin erreichten Sublimierungen sind, um so vollkommener und unmerkbarer sich die sie nun besetzende Angst auf sie verteilen und so abgeführt werden wird. (Klein, 1923: 228-229)

私たちは、エディプス・コンプレックスが抑圧を著しく活性化し、それと同時に去勢不安を引き起こすことを知っている。おそらくまた私たちは、この大きな不安の「高まり」はより早期の抑圧の結果として(たぶん潜在的素質としてのみであるが)存在するようになった不安によって増強される、と仮定することができる——この後者の不安は「一次的去勢」に始まる去勢不安として直接的に作動し始めたものであろう。(…)(二歳ないし三歳のころ起こってくる夜驚症をエディプス・コンプレックスの第一段階の抑圧のなかで現われてくる不安、つまりさまざまな形の結合や発散のなかで生じてきた不安と見なすことは論理の飛躍とはいえない。/ エディプス・コンプレックスが抑圧されるときに発達する去勢不安は、今や、すでにリビード供給を受けた自我傾向に向けられ、さらに今度はこの備給という方法によって結合し解放される。/ それまでの昇華が量的に豊富で質的に強力である度合いに応じて、その昇華に負荷される不安が、目に見えない形で完全に昇華に浸透し、そのようにして解放される、ということとは明白であると私は考える。(クライン、

1983: 96-97' 一部改訳)

クラインがここで問題としたのは、二、三歳の子どもに見られる夜驚症である。この着眼点は子どもを対象に分析活動を行っていた彼女ならではのものといえよう。クラインはそれが去勢不安よりも先に生じるものであり、抑圧された結果として子どもの内に潜在的に存在しつづけ、後に生じた去勢不安を強める作用を持つのだと考えた。夜驚症はエディプス・コンプレックスの最早期に見られる不安であるというこの主張は、すなわちエディプス・コンプレックスがフロイトの想定よりも早期に始まる可能性を示唆するものであった。

子どもの持つ攻撃的な欲求への着目

クラインが一九二六年に発表した「早期分析の心理学的原則」からそれ以降の論文では、徐々に不安そのものの内容に関する記述が見られるようになる。ここでクラインによって詳述された不安とは次のようなものである。

Die auf diese Weise gegen beide Elternteile gerichteten sadistischen Angriffe, in denen diese in der Phantasie zerbrissen, zerrissen, zerschritten, zerstampft werden, lösen die Angst vor der Strafe beider, miteinander vereinigten Eltern aus, (...) (Klein, 1930: 57)

このように、子どもの内のサディスティックな攻撃性はその対象として父親と母親の両方を選び、父親と母親も子どもの空想のなかで、殴られ、ずたずたに裂かれ、切られ、細切れに踏みじられるのである。しかし、子どものこの攻撃性は、結合した両親から罰せられるのではないか、と

の不安を呼び起こす。(クライン、1983: 265、一部改訳)

ここでクラインが述べた内容によれば、子どもの味わっている不安とは子どもが空想のなかで両親に向ける攻撃的な欲求に基づいたものである。空想のなかで欲求のままに両親を攻撃することで、その仕返しとして今度は自分が両親に懲罰を受けるのではないか、自らが傷つけばろばろにした両親と同じように、次は自分自身がばろばろになるまで攻撃を受けるのではないかとこの恐れが子どもに生じる。この恐れこそがクラインの見出した不安である。

クラインのいう子どもが両親に向ける攻撃的な欲求とはどのようなものであろうか。ここでクラインが臨床現場で目の当たりにした例を二つ挙げる。前者は四歳三ヶ月になる女兒・トルード、後者は四歳の男児ジェラルドの事例である。

Sie wollte mich in die Kehle stechen, in den Hof werfen, verbrennen, zur Polizei bringen. (...) Ein andermal wollte sie mich auf den Bauch schlagen und behauptete, sie nehme die A-As (Stuhl) heraus und mache mich arm. (...) Sie war, als die Schwester geboren wurde, zwei Jahre alt, und die Analyse konnte die damalige Situation und auch die Ursachen der Angst, wie des Nüssens und Schmierern klarlegen und diese Symptome auch beheben. Sie hatte schon damals der schwangeren Mutter die Kinder rauben, die Mutter töten und ihre Stelle beim Koitus mit dem Vater einnehmen wollen. (Klein, 1926: 368-369)

彼女〔トルード〕は私〔クライン〕の喉を突いたり、私を中庭へ投げ出したり、私を焼き殺そうとした

り、あるいは私を警察の手に渡そうとしたりした。(…)またあるとき、彼女は私のおなかを叩きたがって、自分は私の「大便」を取り出してすっからかにするのだ、と宣言した。(…)妹が生まれたとき彼女は二歳だったが、そのとき彼女は何を考えていたか、また不安がったりおねしょをしてベッドを汚したりする原因が何であったかが分析によって明らかになった。これらの症状は分析治療によって除去された。そのとき彼女はすでに妊娠中の母親からおなかのなかにいる子どもたちを奪い、母親を殺害し母親に代わって父親と性交したい、という願望を持つに至っていたのである。(クライン、1983: 254-255、一部改訳)

One of his anxiety-objects we ascertained during the analysis was a beast which only had the habits of a beast, but in reality was a man. This beast, which made big noises in the next room, was the father from whom the noises emanated in the adjoining bedroom. The desire of Gerald to penetrate there, to blind the father, to castrate and to kill him caused a dread that he would be treated in the same way by the beast. (Klein, 1975a: 171-172)⁽⁶⁾

分析の間に私たちが突きとめた彼「ジェラルド」の不安対象の一つは獣性の習慣だけを持つ動物であったが、実際は一人の男性であった。隣の部屋で大きな物音をたてるその野獣とは、隣接している寝室で物音をたてる父親であった。寝室に侵入し、父親を目が見えないようにして去勢し殺害したいというジェラルドの欲求は、その野獣から自分が同じような目に遭わせられるのではないかとの恐れを引き起こしていた。(クライン、1983: 207、一部改訳)

日常生活で見かける子どもたちからは想像もできないが、クラインは子どもたちがこういったむごたらしいまでの攻撃的な欲求を持っていることを、彼らの空想から見出していった。

クラインの関心を子どもの持つ攻撃性へと導いたものは、このように臨床現場で得た知見に加えて、彼女の師事していたアブラハムからの影響が考えられる（ヒンシュルウッド、2014；松木、2021）。アブラハムは患者の持つ攻撃性をつぶさに観察しつつ、以下のような結論に至っていたのである。

Nötigte uns die psychoanalytische Erfahrung die Annahme einer prägenitalen, sadistisch-analen Entwicklungsphase der Libido ab, so sehen wir uns nunmehr vor die Notwendigkeit gestellt, innerhalb dieser Phase zwei Stufen anzunehmen. Auf der späteren von beiden walten die konservativen Tendenzen des Festhaltens und Beherrschens vor, auf der früheren dagegen die objektfeindlichen Strebungen des Vernichtens und Verlierens. (Abraham, 1924: 19)

精神分析的な経験は、われわれに否応なしにリビードの前性器的でサディスティックな肛門性の発達期を承認させたが、われわれは、今やこの時期の内に二つの段階を認める必然性の前に立たされている。この二つの段階の内の後の段階においては、保持と支配の保存的な傾向が優勢であり、前の段階においては、これに反し絶滅と喪失の対象敵対的な志向が支配的である。（アブラハム、1993: 32、一部改訳）

フロイトはリビードの前性器的な発達段階、肛門サディズム期が存在することを発見したが、アブラハムはこのように肛門サディズム期がさらに二つの段階へと分割可能であることを明らかにした。リ

ビードの発達段階を精緻化するアブラハムの試みはこれに留まらず次のように続く。

Wir werden somit genötigt, ganz wie zuvor im Bereich der anal-sadistischen, jetzt auch im Bereich der oralen Entwicklungsphase eine Stufung anzunehmen. Auf der primären Stufe ist die Libido des Kindes an den Saugeakt gebunden. (...) Die sekundäre Stufe ist von der primären unterschieden durch die Wendung des Kindes von der saugen den Mundtätigkeit zur beißenden. (...) Durch psychoanalytische Erfahrung ist van Ophuijsen zu der Ansicht gelangt, daß bestimmte neurotische Erscheinungen einer Regression auf das Alter der Zahnbildung entstammen, und fernerhin, daß das Beißen die Urform des sadistischen Impulses darstellt. (Abraham, 1924: 38-39)

こうしてわれわれは肛門サディズムの発達相の領域におけるのとまったく同様に、口唇的な発達相の領域においても一つの段階を仮定せざるを得ない。第一の段階において幼児のリビードは吸う行為に結びついている。(…)第二段階が第一段階から区別されるのは、子どもが吸うという口の機能から、噛むという口の機能へ転向することによる。(…)ヴァン・オプホイセンは精神分析の経験から、一定の神経症的現象は歯が生じる年齢への退行に由来しているということ、かつ噛むということはサディズム的衝動の始原的型態であるという見解に到達した。(アブラハム、1993: 47-48^{*} 一部改訳)

こうしてアブラハムは、肛門期以前の口唇期にもサディスティックな衝動が見られること、それも肛門サディズム期と同様に二つの段階へ分割可能であることを提唱するに至った。そして口唇サディズ

ム期について論じるなかで、ヴァン・オブ・ホイセンの私的な報告を持ち出しながら、乳児の嘔むという行為は対象の破壊を目的とした最早期のサディズム的衝動であると論じている。

クラインは一九一四年にフェレンツィの一患者として精神分析を受けたことで分析家を志すようになり、そのまま彼に師事した。しかしそれから七年後、当時ベルリン精神分析協会を主宰していたアーブラハムと出会い、それ以降は彼を師として仰ぐようになった。師弟関係が始まってからわずか四年後にアーブラハムは病死し、クラインは新たな指導者を見つけることを余儀なくされるが、アーブラハムの攻撃性に向けられた強い関心はそのまま弟子のクラインにおける子どもの攻撃性へ引き継がれたといえる。

不安をもたらす超自我への関心

クラインは自らの臨床経験やアーブラハムから得た知識に基づき、去勢不安という前提をいったん括弧に入れて、子どもの味わう不安の内実を照らし出すに至った。ついで、クラインは子どもの恐れる報復や懲罰の実行者たる空想上の両親、つまり超自我へと関心を移していく。そのような過酷ともいえる両親のイメージもまた、先に挙げた攻撃的な欲求と同じくクラインが臨床現場において遭遇したものである。たとえば、以下は父親に対する攻撃的な欲求を持っていた四歳の男児・ジェラルドの例である。

The desire of Gerald to penetrate there, to blind the father, to castrate and to kill him caused a dread that he would be treated in the same way by the beast. Certain passing habits, such as a

movement of the arms, which analysis proved to be a pushing off of the beast, were due to this anxiety. (Klein, 1975a: 172)

寝室に侵入し、父親を目が見えないようにして去勢し殺害したいというジェラルドの欲求は、その野獣から自分が同じような目に遭わせられるのではないかとその恐れを引き起こしていた。彼の腕の運動のような一過性の癖——分析によって、それは動物を押し出そうとしているのだと分かったが——はこの不安のためであった。(クライン、1983: 207 一部改訳)

この通りジェラルドは自らの攻撃に対する報復として父親が彼を同じ目に遭わせようとするのではないかと恐れていた。症状として表れていた彼の一過性の癖についても、クラインによってそれは父親を追ひ払おうとする仕草だということが明らかになった。

他の例として、ピーターという男児の興じていた人形遊びの内容を以下に挙げる。

(...)he once played, representing himself and his little brother by two tiny dolls, that they were expecting punishment for their naughtiness to the mother; she comes, finds them dirty, punishes them and goes away. The two children repeat their dirty acts again, are again punished, and so on. At last, the dread of punishment becomes so strong that the two children determine to kill the mother, and he executes a little doll. They then cut and eat the body. But the father appears to help the mother, and is killed too in a very cruel manner and also cut up and eaten. Now the two children seem to be happy. They can do what they like. But after a very short time great anxiety sets in, and it

appears that the killed parents are again alive and come back. When the anxiety started the little boy had hidden the two dolls under the sofa, so that the parents should not find them, and then happened what the boy called 'becoming educated'. The father and mother find the two dolls, the father cuts his head off, the mother that of the brother, and then they, too, get cooked and eaten. (Klein, 1975a: 178)

彼〔ピーター〕はかつて、二つの小さな人形をそれぞれ自分と弟に見立て、母親にいたずらをしてはそれによって懲罰されることを求めるといふ遊びをしていた。つまり、母親がやって来て、彼らがあたりを汚していることを知って懲罰を加え、そして去って行くという内容であった。二人の子どもは汚す行為を何度も繰り返してその度に罰された。ついには罰されることへの恐怖が非常に強くなり、二人の子どもは母親を殺害することに決め、それを小さな人形に対して実行した。

さらに二人は〔母親の〕胴体を切り取って食べた。父親が現われて母親を助けようとしたが、父親もまたきわめて残酷なやり方で殺害され、切り裂かれて食べられてしまうのであった。そのとき二人の子どもは幸福そうに見えた。二人は自分たちのしたいようにすることができたのだ。しかし、そのすぐ後には強い不安が起こってきて、殺害された両親が生き返り戻ってくるように思われた。不安が起こり始めると、この子は二つの人形をソファの下に隠して両親に見つからないようにした。するとそれに続いて、この子が「教育されている」と呼んでいることが起こってしまった。つまり、父親と母親は二つの人形を見つけ出し、父親はその子の頭を、母親は弟の頭を切り取り、彼らもまた同じように二人を料理し食べてしまったのである。(クライン、1983: 214-215、一部改訳)

このように、ピーターの興じていた人形遊びは、彼が両親に対して凄まじい攻撃を加えた結果、両親からの復讐に遭って殺されてしまったという展開を見せた。

子どもの空想上の両親、超自我がなぜこころも苛烈なのか、その理由をクラインは一九二八年に発表した論文「エディプス葛藤の早期段階」のなかで次のように論じている。

Die Frühanalyse läßt den Aufbau des Über-Ichs aus den den verschiedensten Perioden und Schichten entstammenden überraschend gegensätzlichen - und zwar sowohl übergütigen wie überstrengen - Identifizierungen erkennen und gibt auch Aufklärung über die phantastische Strenge des Über-Ichs, die besonders in den Frühanalysen deutlich wird. (...) Es ist aber einleuchtend, daß das z. B. einjährige Kind die durch das Einsetzen des Ödipuskonfliktes ausgelöste Angst in Form von Aufgefressen- und Zerstörtwerden empfindet. Der Wunsch, das Objekt durch Beißen, Fressen, Schneiden zu zerstören, führt, eben weil dieses Objekt zufolge der mit den Ödipusregungen einsetzenden Introjektion des Objektes zu einem strafenden wird, zur Angst, die Strafe in adäquater Weise zu erleiden: Das Über-Ich wird ein beißendes, fressendes, schneidendes. \ Die Verbindung der Über-Ich-Bildung mit den pränatalen Entwicklungsstufen ist in doppelter Hinsicht bedeutungsvoll: Das Schuldgefühl wendet sich gegen die noch vorherrschenden oral- und anal-sadistischen Entwicklungsstufen. Andererseits: Dieses erste Stück Über-Ich bildet sich unter der Herrschaft dieser Stufen, wodurch die sadistische Strenge des Über-Ichs eine Erklärung findet. (Klein, 1928: 66)

幼い子どもたちの分析は、超自我構造を精神生活のかなり異なった期間と階層に始まる同一化から組み立てられたものとして示している。これらの同一化群は性質の上で驚くべき矛盾を示している。つまり、過度の善良さと過度の厳格さが併存しているのである。私たちはまた、早期分析のなかで特にはっきりと現われてくる超自我の厳格さの説明もそれらのなかに見出すことができる。(…)ほぼ一歳の子どもにおいて、エディプス葛藤が始まるときに引き起こされる不安がなぜに食い尽され破壊されるという恐怖を形づくるかは明白である。噛みつき食い尽しそして切り刻むことによってリビード対象を破壊することを子ども自ら望むのであるが、そのことが不安を引き起こすのである。というのは、エディプス傾向が目覚めるとその対象が取り入れられるが、その取り入れられた対象はその次には懲罰を課すのではないかと思われるような対象に変わるからである。そうなると、子どもは攻撃にも匹敵した懲罰におののくようになる——すなわち超自我は噛みつき食い尽し切り刻むものになるのである。／超自我の形成と心的発達の前期器期との結びつきは二つの観点から非常に重要である。一方では、罪悪感はそのときまだ支配的である口唇サディズム期と肛門サディズム期とに属しているが、他方、超自我はこれらの時期がもっとも優勢なときに現われてくる。このことが超自我の持つサディスティックな厳格さを説明するのである。(クライン、1928: 226-227、一部改訳)

ここでクラインが述べているように、超自我の持つ過酷な性格は、それがアープブラハムの提唱した口唇サディズム期と肛門サディズム期のもっとも優勢な時期に現れてくることに由来する。この時期に子どもはリビードの対象である両親を破壊してしまいたいという欲求を持っており、その攻撃的な性格が

取り入れを通じて内在化された両親へも反映されるといえるのが彼女の考えであった。クラインは超自我について以下のように論じている。

As we know, the parents are the source of the super-ego, in that their commands, prohibitions, and so on become absorbed by the child itself. But this super-ego is not identical with the parents; it is partly formed upon the child's own sadistic phantasies. (Klein, 1975a: 179)

周知のように、両親は超自我の源であり、超自我という形で両親の命令・禁止・その他のものが子ども自身によって吸収される。しかし、この超自我は両親と同一ではない。つまり、子どもの超自我の一部分は子ども自身のサディスティックな空想に基づいて形成されるのである。(クライン、1983: 216、一部改訳)

つまりクラインの想定した超自我とは、単に両親からの命令や禁止が取り入れられたものではなく、それらに加えて子どものサディスティックな空想からも構成されるといった複合的なものであった。

また、超自我やその発生を引き起こすとフロイトが説いたエディプス・コンプレックスの開始時期に関しても、クラインはそれまでの定説とは異なる新たな主張を行った。

フロイトの考えはエディプス・コンプレックスがファルス期、つまり三〜五歳頃に開始するというものであり(ボンタリス、1977)、それと超自我との関係については以下のように説明されている。

So kann man als allgemeinstes Ergebnis der vom Ödipuskomplex beherrschten Sexualphase einen

Niederschlag im Ich annehmen, welcher in der Herstellung dieser beiden, irgendwie miteinander vereinbarten Identifizierungen besteht. Diese Ichveränderung behält ihre Sonderstellung, sie tritt dem anderen Inhalt des Ichs als Ichideal oder Über-Ich entgegen. (...) Das Ichideal ist also der Erbe des Ödipuskomplexes und somit Ausdruck der mächtigsten Regungen und wichtigsten Libido-schicksale des Es. (Freud, 1923a: 262-264)

かくして、エディプス・コンプレックスに支配された性的発展段階のもたらすもったも一般的結果として、こう仮定することができる。すなわち、このとき自我の内にある種のしこりが生じ、それが、以上二つの——何らかのかたちで差引き合算されひとつに束ねられた——同一化（父同一化と母同一化）を作り出すということである。こうして生じた自我変容は、おのれの特権的地位を保持しつづけ、自我理想ないし超自我として、それ以外の自我の内容に対立することになるのである。（…）自我理想とは、したがってエディプス・コンプレックスの後継ぎであって、それゆえ、エスのきわめて強力な蠱きの表現、エスのきわめて重要なリビド運命の表現にはかならない。（フロイト、2007a: 30-33、一部改訳）

この通り、フロイトは超自我が自我のエディプス・コンプレックスを制圧する手段として形成されると述べた。つまり、発生の順序はエディプス・コンプレックスが先で超自我が後である。

それに対し、クラインは次のように主張する。

We know that the formation of the super-ego takes place on the basis of various identifications. My

results shew that this process, which terminates with the passing of the Edipus complex, i.e. with the beginning of the latency period, commences at a very early age. In my last paper I have indicated, basing my remarks on my findings in the analysis of very young children, that the Edipus complex ensues upon the deprivation experienced at weaning, that is, at the end of the first or the beginning of the second year of life. (Klein, 1927: 355-356)

超自我の形成はさきから同一化の基礎の上に成立することが分かっている。私の得た結果では、この過程はまったくの幼児期早期にすでに始まっており、エディプス・コンプレックスを通過するにしたがって、すなわち潜伏期が始まるとともに終わりを告げる。私は前章で、まだ幼い子どもの分析で見出した所見に基づいて、エディプス・コンプレックスは、離乳による剥奪体験に引き続いて始まること、すなわち生後一年目の末期あるいは二年目の初期にはすでに始まっていることを指摘した。(クライン、1983: 186)

Die Frühanalyse zeigt, daß mit dem Einsetzen des Ödipus-Komplexes das Kind auch schon mit seiner Verarbeitung und so auch mit der Ausbildung des Über-Ich beginnt. (Klein, 1926: 370)

非常に幼い子どもの分析の示すところによると、エディプス・コンプレックスが起り始めるとすぐに、超自我を発達させることによってそれを乗り越えようとする。(クライン、1983: 157)

クラインはこのようにエディプス・コンプレックスが離乳という剥奪体験に引き続いて始まるものと考え、具体的な時期を生後一年目の末期か二年目の初期と想定した。そして超自我はエディプス・コン

プレックスが起り始めてすぐに発達を開始するのだと論じた。クラインの発達時期に関する新たな考えは、一九二三年に夜驚症を取り上げた時点ではまだ着想に過ぎなかったが、ここへきて明確な形で主張されたのである。

ただし、以下のようなクラインの苦心した書きぶりからは、自らの主張によってフロイトと真っ向から対立することを望んではいない様子が窺える。

Daß wir den Höhepunkt des Ödipus-Komplexes um das vierte Lebensjahr annehmen und die Entwicklung des Über-Ich als sein Endergebnis kennen, scheint mir zu diesen Beobachtungen nicht in Widerspruch zu stehen. Die gewissen typischen Erscheinungen, die wir in deutlichster Ausbildung feststellen können, wenn der Ödipus-Komplex seinen Höhepunkt erreicht hat, und die seinem Abklingen vorangehen, sind nur der Endabschluß einer Entwicklung, die sich auf Jahre erstreckt. (Klein, 1926: 370)

しかし、エディプス・コンプレックスの絶頂期を四歳頃に想定することや、超自我の発達をエディプス・コンプレックスの最終結果であるとすることは、私の観察と決して相反するようには思えない。それらの明白で定型的な現象は数年を要する発達の単なる結末にすぎないのであって、はつきりと成熟した形でその存在が認められるのは、エディプス・コンプレックスが絶頂期に達した後の衰退の始まる前までである。(クライン、1983: 157、一部改訳)

By the super-ego I understand (and here I am in complete agreement with what Freud has taught us

of its development) the faculty which has resulted from the Oedipus development through the introjection of the Oedipus objects, and, with the passing of the Oedipus complex, has assumed a lasting and unalterable form. (Klein, 1927: 358)

超自我に関して私が理解するところでは(こ)で私はフロイトが超自我の発達について教えてくれたことを完全に承認するが、その機能はエディプス対象の取り入れを通したエディプスの発達から生じ、またエディプス・コンプレックスの通過にしたがって持続的で不変の形態になるものと推測される。(クライン、1983: 188' 一部改訳)

超自我の発達開始は定説より早期だとしても、それが成熟した形で見られるのは定説通りエディプス・コンプレックスの絶頂期よりも後であるとか、超自我の発達に関するフロイトの理論は、時期を除けば全面的に支持できるといった、これらのフロイトに対するおもねりをクラインは同じ論文のなかに書き残している。

発達時期に続いて、クラインは最早期の不安に対してもフロイトの考えに新たな視点を提示する。クラインが言及したのは、フロイトが次のように述べた幼児期早期の危機状況とそれによって引き起こされる不安についてである。

Nur wenige Fälle der kindlichen Angstäußerung sind uns verständlich, an diese werden wir uns halten müssen. So, wenn das Kind allein, in der Dunkelheit, ist und wenn es eine fremde Person an Stelle der ihm vertrauten (der Mutter) findet. Diese drei Fälle reduzieren sich auf eine einzige

Bedingung, das Vermissen der geliebten (ersehten) Person. Von da an ist aber der Weg zum Verständnis der Angst und zur Vereinigung der Widersprüche, die sich an sie zu knüpfen scheinen, frei. (...) Wenn der Säugling nach der Wahrnehmung der Mutter verlangt, so doch nur darum, weil er bereits aus Erfahrung weiß, daß sie alle seine Bedürfnisse ohne Verzug befriedigt. Die Situation, die er als "Gefahr" wertet, gegen die er versichert sein will, ist also die der Unbefriedigung, des Anwachsens der Bedürfnisspannung, gegen die er ohnmächtig ist. (...) Das Vermissen der Mutter wird nun die Gefahr, bei deren Eintritt der Säugling das Angstsignal gibt, noch ehe die gefürchtete ökonomische Situation eingetreten ist. (Freud, 1926: 167-168)

小児における不安の表出のうち、私たちに理解できるのは僅かな場合しかなく、私たちはこれらに縋らねばならない。すなわち、子供が独りでいる場合、また暗い場所にいる場合、そして信頼のおける人物(母親)の代わりに、見知らぬ人物を見出す場合である。これら三つは、ただ一つの条件へと還元することができる。すなわち、愛する(憧れの)人物の不在である。(…)乳児が母親を知覚することを希求するのは、乳児は、母親が彼の欲求の全てを遅滞なく満たしてくれることを、既に経験によって知っているからにはかならない。乳児が「危険」と評価し、そこから護られようとする状況とは、不満足の状態、いいかえれば、彼がそれに対して無力であるような欲求、緊張の高まった状況である。(…)今や母親の不在という状況の到来は、恐れられている経済論的状況が到来するのに先立って、乳児が不安信号を送る危険となる。(フロイト、2010: 64-65、一部改訳)

ここでフロイトの考えていた幼児期早期の危機状況とは、自分を愛してくれる人物あるいは自分が熱

望している人物を喪失するというものであった。この考えについて一九二九年に発表した論文「芸術作品および創造的衝動に表われた幼児期不安状況」のなかでクラインは以下のように主張を展開する。

I wanted to recall these notions of mine to your minds because I can make a bridge from them to a notion of Freud's: one of the most important of the new conclusions which he has put before us in his *Hemmung, Symptom und Angst*. I refer to the hypothesis of an early infantile situation of anxiety or danger. (...) Freud's hypothesis is that there is an infantile danger-situation which undergoes modification in the course of development, and which is the source of the influence exercised by a series of anxiety-situations. (...) Freud assumes that the infantile danger-situation can be reduced ultimately to the loss of the beloved (longed-for) person. In girls, he thinks, the loss of the object is the danger-situation which operates most powerfully; in boys it is castration. My work has proved to me that both these danger-situations are a modification of yet earlier ones. I have found that in boys the dread of castration by the father is connected with a very special situation, which, I think, proves to be the earliest anxiety-situation of all. As I pointed out, the attack on the mother's body, which is timed psychologically at the zenith of the sadistic phase, implies also the struggle with the father's penis in the mother. A special intensity is imparted in this danger-situation by the fact that a union of the two parents is in question. According to the early sadistic superego, which has already been set up, these united parents are extremely cruel and much dreaded assailants. Thus the anxiety-situation relating to castration by the father is a modification, in the course of development,

of the earliest anxiety-situation as I have described it. (Klein, 1929: 438-439)

私のこの考えを読者の皆さんの記憶にしっかりと留めておいてほしいと思うのは、この考えと次に述べるフロイトの考えとの橋渡しをしようと思うからである。フロイトが「制止、症状、不安」のなかで提示したきわめて重要で新しい結論の一つ、幼児期早期に見られる不安および危機状況についての仮説がそれである。(…)そのフロイトの仮説というのは、発達過程で加工されて原型からいくぶん形を変えてはいるが、一連の不安状況によってもたらされる影響の源泉となる幼児期危機状況というべきものが存在しているというものである。(…)フロイトは、この幼児期の危機状況は究極のところ自分を愛してくれる(あるいは自分が熱望している)人物を喪失したことに還元できるとし、女の子ではこの対象喪失はきわめて強力に作用し、それが幼児期の危機状況となるが、男の子では去勢がそれに該当すると考えた。私はすでに自分の研究を通じて、男女を問わずフロイトのいう幼児期の危機状況はいずれもより早期のそれが加工されたものであることを証明してきた。男の子の場合の父親による去勢不安も、最早期の不安状況であると思うあのきわめて特殊な状況と結びついたものにすぎないことが分かる。私がすでに指摘したように、母親の身体に加えられる攻撃も、心理学的な発達段階から見るとサディズムの頂点に一致し、母親のなかにある父親のペニスに対する闘争を意味しているのである。この危機状況は両親の結合が問題になるという事実によって特に激しさが加わってくる。このときすでに早期のサディスティックな超自我は形成されており、そのため結合した両親というのは幼児にとって残酷きわまりない恐怖に満ちみちた攻撃者に見えるに違いない。このように、父親による去勢と結びついた不安状況は、今述べた最早期の不安状況が発達過程で加工された姿なのである。(クライン、1983: 256-257、一部

改訳)

このようにクラインは、フロイトのいう幼児期早期の危機状況は自らの発見した不安状況が加工された二次的なものであって、子どもの攻撃的な欲求に基づいた超自我からの懲罰に対する恐れこそが最期の不安であると論じた。

また、ここでクラインは自らが初期に依拠していた去勢不安についても独自の見解を披露している。最早期の不安状況において子どもは母親の身体の下に父親のペニスがあるという空想を持ち、それに対して母親の身体を攻撃することで闘争の意思を表す。この父親のペニスに対する攻撃は子どもに報復の恐れを生じさせる。こうした最早期の不安状況が加工され、後の発達過程において出現したものが、父親によって去勢されるという不安だとクラインは説明した。

こういった主張が世に出た当時、クラインはフロイトの娘であるアンナから強い反駁を受けることになった。特に超自我に関して、アンナ・フロイトは以下のように述べている。

Das Kind ist nicht wie der Erwachsene bereit, eine Neuaufgabe seiner Liebesbeziehungen vorzunehmen, weil - so könnte man sagen - die alte Auflage noch nicht vergriffen ist. Seine ursprünglichen Objekte, die Eltern, sind noch in Wirklichkeit, nicht wie beim erwachsenen Neurotiker in der Phantasie, als Liebesobjekte vorhanden, zwischen ihnen und dem Kind bestehen alle Relationen des täglichen Lebens, alle Befriedigungen und Enttäuschungen werden noch realiter an ihnen erlebt. Der Analytiker tritt als eine neue Person in diese Situation ein, er wird sich

wahrscheinlich mit den Eltern in die Liebe oder den Haß des Kindes zu teilen haben. Es besteht aber für das Kind keine Nötigung, ihn ohneweiters mit den Eltern zu vertauschen, er bietet, den ursprünglichen Objekten gegenüber, nicht alle jene Vorteile, die der Erwachsene findet, wenn er seine Phantasieobjekte gegen einen wirklichen Menschen vertauschen darf. (Anna Freud, 1929: 56)

大人と異なり子どもは、愛情関係の新版を作り出す段階には至っていないといえますが、それは、子どもにとってはまだ旧版が使用中のものとして存在するからです。子どもにとっての原対象、つまり両親はまだ愛情対象として現実中存在しています——大人の神経症の人の場合のように、空想のなかだけに留まらないところに差があるのです。親と子どもの間には、日常生活のなかでさまざまな結びつきがあり、子どもが充足感を味わうか失望するかは、ひとえに親によるのです。分析家は、このような親子関係が存在するなかへ新しい人として入っていく、子どもが示す愛情や憎悪を、親と共有することになるのです。しかし、子どもから見ると、分析家をすっかり両親の代わりとする必要性はないわけです。なぜかといえば、大人の場合は、現実にいる人、つまり分析家を空想上の愛情対象で置き換えることで利点がありますが、子どもの場合は、それをして両親と比べて、得をすることはありません。(アンナ・フロイト、1981: 44-45、一部改訳)

アンナ・フロイトはこのように述べ、現実には両親の養育下にある子どもにとって彼らをわざわざ空想上の存在にする利点がないと指摘している。クラインの考えるような、実際の両親から独立した強固なイメージとしての超自我は、子どものなかに育っていないというのが彼女の反論であった(下司, 1999: Donaldson, 1996)。

アンナ・フロイトに続いてウィーンを拠点とする他の精神分析家たちもクラインの独創的な考えに発し、フロイトも娘の側に立ったことから、クラインは精神分析家として非常に不利な状況へと陥った。師であるアーブラハムはクラインの擁護に努めていたが、論争が激化していくさなかに病によって逝去してしまい、クラインの孤立はますます深まっていった。そこへ現れたのが、イギリスを拠点に活動していた精神分析家のアリックス・ストレイチーである。彼女はクラインの提唱する理論の斬新さに魅了されていた。そのことを夫であり同じく精神分析家であるジェームズへ宛てた手紙にも次のように書き残している。

I meant to tell you how exciting last night's Sitzung had been. For Die Klein propounded her views & experiences on Kinderanalyse, & at last the opposition showed its hoary head-& it really was too hoary. (...) In fact, everyone rallied to her & attacked the 2 swarthy Hungarians. She gave 2 specially brilliant examples. (...) if die Klein reports correctly, her case seems to me to be quite overwhelming. She's going to Vienna to read her paper; & it is expected that she will be opposed by Bernfeldt & Eichhorn (?), those hopeless pedagogues, & I fear, by Anna Freud, that open or secret sentimentalist. (Meisel & Kendrick, 1986: 145-146)

私はあなたに昨夜の会合がいかに刺激的だったかをお伝えしたかったです。というのも、クラインが児童分析に関する彼女の見解と経験を述べ、最後には反対派がそれに難癖をつけたからです。その難癖というのは本当に古臭すぎる内容でした。(…)実際、誰もがクラインのもとに集って、「反対派である」浅黒い肌のハンガリー人二人にやり返しました。それからクラインは特に素晴

らしい例を二つ挙げたのです。(…)クラインの報告が正しければ、彼女の症例はかなり圧倒的といえるものです。彼女はこれから論文を発表するためにウィーンに向かうようですが、そこでベルンフェルトやアイヒホルン(?)のような絶望的な教育者、あとは公然の、あるいは隠れた感傷主義者であるアンナ・フロイトから反対を受けることになるでしょう。

ここから読み取れるように、ストレイチーにはウィーン精神分析協会の唱える理論よりも、クラインの主張の方がもっともらしく感じられていたようである。そして彼女の橋渡しによってクラインは英国精神分析協会を率いるアーネスト・ジョーンズとのつながりを得ることになった。⁽⁹⁾これを機にクラインはイギリスという新天地へ移り、自らの精神分析家としての立場を確固たるものにするべく、超自我の起源についてさらに探究を進めていくこととなる。

「絶滅の恐怖」の誕生

フロイトによる「死の欲動」の提唱

一九三二年、クラインは児童分析の技法を第一部、子どもの早期発達段階に関する理論を第二部とした著作『児童の精神分析』を出版した。そのうち第一部はまだベルリンに住んでいたころ、一九二五年

に英国精神分析協会から招聘されロンドンで行った六回分の講義録である。そこで温かな賛辞を受けたクラインは翌年ロンドンへの移住を決意した。また第二部は児童分析の経験に加えて成人の分析も視野に入れ、数年をかけて書き上げられた。クラインにとってこの時点における集大成ともいべき著作は、同年にアリックス・ストレイチャーによって英訳され、出版された。その内容についてクラインは以下のように序文で力強く語っている。

Dem ursprünglichen Plane nach sollte der erste Teil der Darstellung der von mir ausgearbeiteten Technik, der zweite Teil der Zusammenfassung der theoretischen Ergebnisse gewidmet sein, die ich nach und nach aus der praktischen Arbeit gewann und die mir geeignet scheinen, nun als Stütze der von mir angewendeten Technik zu dienen. Während der Ausarbeitung dieses Buches, die eine Zeitspanne von einigen Jahren umfaßte, hat dessen zweiter Teil seinen Rahmen gesprengt. Meine Erfahrungen in der Psychoanalyse Erwachsener, die zu den in der Kinderanalyse gewonnenen hinzutraten, haben dazu geführt, daß ich meine Auffassung von den frühesten Entwicklungsstufen auch auf die Erwachsenenpsychologie anwandte. Ich kam dabei zu Resultaten, die ich nun als Beiträge zur psychoanalytischen Theorie der frühesten Entwicklungsstufen der Öffentlichkeit vorlege. (Klein, 1932: 7)

私が本来思い描いていたのは、第一部を私の開発した技法の記述にもっぱら割き、第二部を理論的な結論の記述に割くというものであった。その理論的結論は臨床実践によって徐々にもたらされたものであり、今では私の技法の基礎として適切なもののように思われる。しかし、この本を

書いていく過程の中で——それは数年にわたる仕事であったが——第二部はその範疇を越えてしまった。子どもの分析における私の経験に加えて、さらに成人の分析における観察をすることによって、子どもの早期の発達段階に関する私の見解を成人の心理学にも応用することになった。私はある結論に達し、これからそれについて述べるが、それは個人における早期発達段階の分析的理論一般に対しての寄与となるものといえる。(クライン、1997: xi、一部改訳)

このように早期発達段階に関する精神分析理論への大きな寄与を謳った第二部は「第八章 エディプス葛藤と超自我の早期の段階」から始まる。そのなかでクラインは、一九二〇年にフロイトが論文「快楽の彼岸」において提唱した死の欲動という概念を導入している。以下は、欲動とはどういうものか、そのなかでも死の欲動とは何を指すのかについてのフロイトによる説明である。

Wir haben nun Material für die Unterscheidung von Triebreiz und anderem (physiologischem) Reiz, der auf das Seelische einwirkt, gewonnen. Erstens: Der Triebreiz stammt nicht aus der Außenwelt, sondern aus dem Innern des Organismus selbst. Er wirkt darum auch anders auf das Seelische und erfordert zu seiner Beseitigung andere Aktionen. Ferner: Alles für den Reiz Wesentliche ist gegeben, wenn wir annehmen, er wirke wie ein einmaliger Stoß; er kann dann auch durch eine einmalige zweckmäßige Aktion erledigt werden, als deren Typus die motorische Flucht vor der Reizquelle hinzustellen ist. Natürlich können sich diese Stöße auch wiederholen und summieren, aber das ändert nichts an der Auffassung des Vorganges und an den Bedingungen der

Reizaufhebung. Der Trieb hingegen wirkt nie wie eine momentane Stoßkraft, sondern immer wie eine konstante Kraft. Da er nicht von außen, sondern vom Körperinneren her angreift, kann auch keine Flucht gegen ihn nützen. Wir heißen den Triebreiz besser „Bedürfnis“, was dieses Bedürfnis aufhebt, ist die „Befriedigung“. Sie kann durch nur eine zielgerechte (adäquate) Veränderung der inneren Reizquelle gewonnen werden. (Freud, 1915a: 85)

これによってわれわれは、欲動刺激と、心に対して働きかけはするけれども欲動刺激ではないような(生理学的な)刺激とを区別しておくための材料を手に行っている。まずはじめに、欲動刺激は、外界からではなく、有機体組織そのものの内部から発生する。それゆえ欲動刺激は心に対して別の仕方で働きかけ、その除去のためにも別の行動を要請する。さらには、刺激にとって本質的なあらゆることからは、それが一回きりの衝撃のように働くとは仮定してみれば与えられる。というのは、その除去もまた、一回きりの行動によってなされるからである。その典型例としては刺激源泉を前にしての逃避行動を考えてみればよい。もちろんこれらの衝撃は反復も累積もされるであらうが、だからといって刺激の過程の把握や刺激の終息の条件に何か変化があるわけではない。これに対して、欲動は決して瞬間的、衝撃力としては働かず、いつでも恒常的な力として働いている。欲動は外からではなく身体内部から襲いかかってくるのであるから、そこからどう逃避しようとも無益である。欲動刺激を「欠乏状態(欲求)」と呼べば、それをより良く言い表したことになる。というのは、欠乏状態(欲求)は、それを「満足」させることによってなくなるものだからである。この「満足」が得られるのは、内的な刺激源泉に、その目的に適った(適合的な)変化が生じることによってのみである。(フロイト、2010a: 169)

Auch dieses Endziel alles organischen Strebens ließe sich angeben. Der konservativen Natur der Triebe widerspräche es, wenn das Ziel des Lebens ein noch nie zuvor erreichter Zustand wäre. Es muß vielmehr ein alter, ein Ausgangszustand sein, den das Lebende einmal verlassen hat, und zu dem es über alle Umwege der Entwicklung zurückstrebt. Wenn wir es als ausnahmslose Erfahrung annehmen dürfen, daß alles Lebende aus inneren Gründen stirbt, ins Anorganische zurückkehrt, so können wir nur sagen: Das Ziel alles Lebens ist der Tod, und zurückgreifend: Das Leblose war früher da als das Lebende. (Freud, 1920: 40)

あらゆる有機体が追求するこの最終目標についても、それが何であるかをいえないことはない。生命の目標がいつまでたっても達成されなかった状態であるならば、それは欲動の守旧的本性に矛盾することになる。その目標はむしろ、生命あるものがかつていったん放棄したもの、あらゆる進化発展の迂路を経ながら帰り着こうとする昔の状態、生命の出発点である状態でなければならない。生命あるものはすべて内的根拠にしたがって死に、無機的なものへと帰ってゆくということ、例外なき経験として仮定することが許されるなら、われわれは次のようにしかいようがない。すなわち、あらゆる生命の目標は死であり、翻っていうなら、無生命が生命あるものより先に存在していたのだ、と。(フロイト、2006: 92、一部改訳)

このようにフロイトは述べ、欲動とは有機体の内部から発生する逃避不可能な力であること、そして死の欲動とは有機体を死に向かわせる力であり、これはあらゆる有機体に備わっていることを主張した。

当時の精神分析家たちにとってこの概念の存在はにわかに信じがたく、クラインなど一部の例外を除いてフロイトは概念への賛同を得ることができなかった(ヒンシュェルウッド、2014; 松木、2021)。提唱から三年後にはフロイト自身も次のように釈明をしている。

Da wir aber dazu genötigt sind, müssen wir den Eindruck gewinnen, daß die Todestribe im wesentlichen stumm sind und der Lärm des Lebens meist vom Eros ausgeht. (Freud, 1923a: 275)
(…)死の欲動は本質的に沈黙し、生の騒音はほとんどがエロスから発しているといった印象を受けざるを得ないのである。(フロイト、2007a: 46)

これはつまり、死の欲動を臨床的に観察することはできないことを意味している。フロイトのこうした発言を受けて、他の分析家たちはそれがあくまで思弁的な概念であると理解した。このようにして死の欲動という概念はそれ以上の発展を試みられないまま脇へと押しやられていったのである(ヒンシュェルウッド、2014; 松木、2021)。

「死の欲動」の導入とそれのもたらした変化

死の欲動が精神分析界の主流から外されていった一方で、この概念はクラインの理論を大きく前進させるのに役立った。当時クラインは超自我の起源という壁に直面していたが、この概念によってその壁を突破することができた(ヒンシュェルウッド、2014)。そして壁の突破に至る過程のなかで、クラインは最

早期の不安、つまり絶滅の恐怖の着想を得たのである。

超自我の起源に関して、フロイトは超自我という概念そのものを提唱した一九二三年の論文「自我とエス」のなかで以下の通り述べている。

So kann man als allgemeinstes Ergebnis der vom Ödipuskomplex beherrschten Sexualphase einen Niederschlag im Ich annehmen, welcher in der Herstellung dieser beiden, irgendwie miteinander vereinbarten Identifizierungen besteht. Diese Ichveränderung behält ihre Sonderstellung, sie tritt dem anderen Inhalt des Ichs als Ichideal oder Über-Ich entgegen. (...) Es ist der Psychoanalyse unzählige Male zum Vorwurf gemacht worden, daß sie sich um das Höhere, Moralische, Überpersönliche im Menschen nicht kümmere. (...) Nun, da wir uns an die Analyse des Ichs heranwagen, können wir all denen, welche, in ihrem sittlichen Bewußtsein erschüttert, geklagt haben, es muß doch ein höheres Wesen im Menschen geben, antworten: Gewiß, und dies ist das höhere Wesen, das Ichideal oder Über-Ich, die Repräsentanz unserer Elternbeziehung. Als kleine Kinder haben wir diese höheren Wesen gekannt, bewundert, gefürchtet, später sie in uns selbst aufgenommen. (Freud, 1923a: 262-264)

かくして、エディプス・コンプレックスに支配された性的発展段階のもたらすもつとも一般的な結果として、こう仮定することができる。すなわち、このとき自我の内にある種のしこりが生じ、それが、以上二つの——何らかのかたちで差引き合算されひとつに束ねられた——同一化(父-同一化と母-同一化)を作り出すということである。こうして生じた自我変容は、おのれの特権的地

位を保持しつづけ、自我理想ないし超自我として、それ以外の自我の内容に対立することになるのである。(…)これまで精神分析には、人間の内にある高尚なもの、道徳的なもの、個を超えたものに配慮していない、という非難が数え切れないほど浴びせかけられてきた。(…)われわれは今、あえて自我の分析に踏み込んだところで、倫理意識を揺さぶられて「人間には高尚なものが存在するはずだ」と嘆きの声を挙げてきたすべての人に対して、こう答えを返すことができる。たしかに存在する、そしてその高尚なものとは、われわれの両親との関係を代理している自我理想ないしは超自我にはかならない、と。われわれは幼児期に、この高尚なものに出会い、これを賛嘆し、また恐れたのであって、そしてそのあとに、これをわれわれ自身のなかへと取り込んだのである。(フロイト、2007a: 30-33、一部改訳)

このように、フロイトは超自我が両親および両親との関係の取り入れによって生じると説明した。それに対して、クラインが主張した超自我の発生は次のような順序を踏む。

Wir wissen aber, daß der Destruktionstrieb gegen den Organismus gerichtet ist. Er muß vom Ich als Gefahr empfunden werden. Meiner Auffassung nach ist es diese Gefahr, die sich als Angst fühlbar macht. Die Angst würde demnach aus der Aggression entstehen. (...) Nur scheint es mir, daß die Gefahr (d. h. die „psychische Hilflosigkeit im Falle der Triebgefahr“) von den destruktiven Triebregungen ausgeht. / Freud beschreibt, daß die narzißtische Libido, um die Zerstörung des Organismus durch den Todestrieb zu verhindern, diesen nach außen gegen die Objekte abdrängt. Er

sieht diesen Prozeß als grundlegend für die sadistische Beziehung zu den Objekten und den Mechanismus der Projektion an. „Ein anderer Anteil des Todestriebes macht diese Verlegung nach außen nicht mit - er verbleibt im Organismus und wird dort mit Hilfe der erwähnten sexuellen Mierregung libidinös gebunden; in ihm haben wir den ursprünglichen erogenen Masochismus zu erkennen.“ (...) Die durch die destruktiven Triebregungen ausgelöste Angst macht sich - so scheint es mir - im Ich nach zwei Richtungen geltend. Sie beinhaltet die Vernichtung des eigenen Körpers durch die destruktiven Triebregungen, ist also Angst vor einer inneren Triebgefahr. Zugleich aber zentriert sie, da ja die sadistischen Triebregungen auf das Objekt gerichtet sind, auch um das Objekt als Gefahrenquelle. (...) Hiebe wird allem Anschein nach die - unerträglichere - Angst vor der inneren Triebgefahr mit voller Wucht auf das Objekt verschoben und so in eine äußere Gefahr verwandelt. (Klein, 1932: 136-138)

しかし私たちは、破壊欲動は有機体そのものに対して向けられ、それゆえに自我によって危険なものとしてみなされなければならないことを知っている。私は個人によって不安として感じられるものは、この危険性だと考えている。したがって、不安は攻撃性から生じるものであるといえるだろう。(…)私の主張は、彼〔フロイト〕が「欲動危険の場合なら心的な寄る辺なさ」と呼ぶ危険は、破壊的な欲動の蠢きから生じるということである。／フロイトは、有機体自身を破壊することから守るために、有機体の自己愛的リビードは死の欲動を外界に押しやって、対象に向けるということを言っている。彼はこの仮定が、個人における対象とのサディスティックな関係や投影の機制に基本的なものであると考えている。彼は次のように言っている。「死の欲動の」もう一方

の部分は外へ移転されることなく、有機体内部に留まり、そこで先に述べた性的な共興奮によってリビード的に拘束される。その内にこそ本来の性源的マゾヒズムが認められるべきである。」
(…)自身の破壊的な衝動によって子どものなかに掻き立てられた不安は、私の考えでは自我の中で二通りに感じられる。一つ目は彼自身の破壊的な欲動の蠢きによる彼の身体の絶滅を意味する、内的な欲動的危険の恐怖である。二つ目は、それと同時に彼のサディスティックな感情が対象に向けられるために生じる、危険の源としての外的な対象に対する恐怖である。(…)ここでは欲動的な危険に対する耐えがたい恐怖を彼の対象に全力で移し変え、内的な危険を外的なものに変換しているように見える。(クライン、1997:152-155 一部改訳)

このように、まず有機体に向けられた死の欲動がその内部に不安を引き起こす。ここでいう不安とは、自らの身体が絶滅してしまうという恐怖と対象から破壊されるという恐怖の二つを指している。前者が先に生じ、その不安から身を守るために、自らの内に向いていた死の欲動を外的な対象へと向け変えることで後者が生じる。そして以下の段階へと続く。

Freud kam in “Jenseite des Lustprinzips” zur Aufstellung, dass von Beginn der Entwicklung an ein Individuum der Aggressionstrieb (Todestrieb) durch den Lebenstrieb (Eros, Libido) bekämpft und gebunden wird, wobei es zur Verlötung der bei den Triebarten, und damit zur Inangangsetzung des Sadismus kommt. Um der Zerstörung durch den Todestrieb zu entgehen, drängt die narzisstische Libido diesen nach außen gehen die Objekte ab, ein Prozeß den Freud für grundlegend hält sowohl

für die sadistische Beziehung zu den Objekten wie auch für den Mechanismus der Projektion. Mit dieser Wendung des Todestribs nach außen-gegen die Objekte - geht aber nach meinen Ergebnissen auch eine Reaktion nach innen, nämlich eine Abwehr gegen den Destruktionstrieb. Die Gefahr der Zerstörung durch den Aggressionstrieb löst Übermäßige Spannung die sich als Angst fühlbar macht im Ich aus, dem demnach schon im Beginne seiner Entwicklung die Aufgabe zufiele, die Libido gegen den Todestrieb zu mobilisieren. Diese Aufgabe kann aber nur unvollkommen gelöst werden, da zufolge der Verlötung zwischen Libido und Aggression eine Trennung der beiden Triebarten anscheinend nicht mehr möglich ist. Es kommt allem Anschein nach zu einer Spaltung im Es, derzufolge ein Teil der Triebregungen die mit der "Urverdrängung" zusammen fallen dürfte, sich gegen den angeregeren Teil wendet. In dieser wohl frühesten Abwehr des Ich sehe ich den grundlegenden Faktor für die Genese des Überrich, dessen auf den frühesten Stufen so gewalttätiger Charakter sich mir daraus erklärt, dass es aus den höchstgesteigerten destruktiven Trieb regungen abgespalten, nebst Quantitäten von Libido auch große Quantitäten an Aggression enthält. (Klein, 1933: 3-4)

「快原理の彼岸」(1920)という書物のなかで、フロイトは、人間の生命の始まりにすでに攻撃欲動(死の欲動)が生(エロス、リビド)と対立し絡みあっている、という理論を提唱した。続いて、二つの欲動の融合が起こり、サディズムへと変わっていく。その死の欲動に破壊されることから逃れるために、生物体は、自己愛的リビドを用いて前者(死の欲動)を外へ押し出し、対象へと向けるのである。フロイトは、この過程を人間の対象とのサディスティックな関係の基本

であると考えた。私はさらに、死の欲動が対象へと外に向かって向かうのと並行して、精神内界では外界へ向けられなかった残りの部分に対する防衛反応が進行する、ということを書いておきたい。というのは、攻撃欲動によって破壊されるという危機感が自我内に過度の緊張——自我にとっては不安として感じられる——を引き起こすために、心的発達の初めにすでに自我は死の欲動に対してリビドを動員するという課題に直面させられることになるからである。しかしながら、二つの欲動が融合しているために、それらを再び分離させるということができないので、その課題は不完全に達成されるにすぎない。おそらく「原抑圧」と同じように、欲動の一部が他の部分に対して向けられた結果として、精神のイドにおいて分割が起こることになるのである。私は、自我の側のこの最早期の防衛手段が超自我発達の礎石となっていると考えている。そしてここで、超自我の持つ早期段階の過剰な暴力性は、それが非常に激しい破壊欲動の支流であって、ある量のリビドと一緒に膨大な量の攻撃欲動を含んでいるという事実から説明できるように思う。(クライン、1983:5-6、一部改訳)

ここで述べられているように、外的な対象へと向け変えきれず有機体のなかに残存する死の欲動に対して防衛機制が働く。具体的にはイドの分裂がそれにあたり、このことが超自我形成の礎となる。

クラインは一九二六年の時点で超自我の発生が生後一年目の末期もしくは二年目の初期であると想定していたものの、それを裏づける理論的証拠の獲得に苦慮していた。そうした点をアンナ・フロイトからも批判されていたが、あらゆる有機体に誕生時から備わっている死の欲動を超自我の起源に対する説明材料として取り入れることで、それが定説よりも早期であることに矛盾が生じないよう自らの理論

をさらに練り上げた。

また、この斬新な超自我形成の過程を思索するなかで、彼女は最早期に味わう不安の実体についてもさらに考えを深めることになった。それは今や子どもの両親へ向けた攻撃的な欲求に基づいた超自我からの懲罰に対する恐れではない。最早期の不安とは死の欲動に基づく内からの絶滅への恐怖であり、さらにはその恐怖から逃れるために死の欲動の向きを転換させ、そうして生じた対象からの破壊に対する恐怖なのである。

「死の欲動」の表れとしての破壊欲動

ところで、クラインは死の欲動を導入した著作のなかで、死の欲動を意味する“*Todestrieb*”(死の欲動)よりもむしろ、“*Destruktionstrieb*”(破壊欲動)⁽¹⁰⁾や“*destruktive Triebseeregungen*”(破壊的な欲動の蠢き)⁽¹¹⁾という用語を積極的に用いている。これら二つの用語はクラインによって同一の内容を指すために用いられていることが多く、明確な使い分けは見受けられない。また訳語にはアックス・ストレイチーが英語で主に“*the destructive instinct(s)*”や“*the destructive impulses*”をあてているが、必ずしも原語と訳語で対にはなっていない。日本語の『メラニー・クライン著作集』においては英語版に対応して「破壊的な本能」、「破壊的(な)衝動」という訳語があてられている。以下はこれらの用語がクラインによって同一の内容を指している一例である。斜体・下線の“*Destruktionstrieb*”(破壊欲動)と“*destruktiven Triebseeregungen*”(破壊的な欲動の蠢き)のいずれも有機体内に残存している破壊欲動を指している。

Es scheint mir nun, daß das Ich noch einen anderen Weg zur Bewältigung der im Organismus verbleibenden Anteile des *Destruktionstriebes* einschlägt, daß es nämlich einen Teil der Triebregungen zur Abwehr gegen den anderen Teil mobilisiert. Es käme so zu einer Spaltung im Es, die mir der einleitende Schritt für die Entwicklung der Triebhemmungen und für den Prozeß der Über-Ich-Bildung zu sein scheint und vielleicht mit der Uverdrängung zusammenfällt. Man kann annehmen, daß diese Spaltung dadurch ermöglicht wird, daß gleichzeitig das einverleibte Objekt (und zwar sobald der Prozeß der Einverleibung begonnen hat) zum Träger der Abwehr gegen die *destruktiven Triebregungen* wird. (Klein, 1932: 137)

自我は有機体の中に依然として残っているこれらの破壊欲動を克服する他の手段を持っているように私には思われる。自我はそれらの一部を他の部分に対する防衛として動員することができる。そうしてイドは分裂を被ることになるが、このことは欲動の抑制の発達と超自我の形成における最初の段階となり、原抑圧とも同じものであるかもしれないと私は考える。この分裂は、体内化の過程が始まるやいなや、体内化された対象が有機体内の破壊的な欲動の蠢きに対する防衛の媒体になるという事実によって仮定することができる。(クライン、1997:153-154、一部改訳)

この“*Destruktionstrieb*”(破壊欲動)という用語は、一九一三年にポール・フェダーンによって書かれた論文(Federn, 1913)においてその初出を確認できる。これは前年に発表されたザビーネ・シュピールマンの論文「生成の原因としての破壊」に対するレビュー論文である。ただしシュピールマンの論文内には“*Destruktionstrieb*”(破壊欲動)という用語が登場していないため、彼女が“*Zerstörungstrieb*”と

いう用語を用いて表現した概念をフェダーンが自ら創作した用語で指し示したものである。⁽¹²⁾

“Zerstörung”とは「破壊する」という意味の動詞“zerstören”の名詞形である。

そのシニョールラインの論文は以下のコメンツ(Jung, 1910)からの引用で始まる。

Die leidenschaftliche Sehnsucht, d. h. die Libido hat ihre zwei Seiten: sie ist die Kraft, die alles verschönt und unter Umständen auch alles zerstört. Man gibt sich öfters den Anschein, als ob man nicht recht verstehen könne, worin denn die zerstörende Eigenschaft der schaffenden Kraft bestehe. Eine Frau, die sich, zumal unter heutigen Kulturumständen, der Leidenschaft überläßt, erfährt das Zerstörende nur zu bald. Man muß sich um ein wenig aus nur bürgerlich gesitteten Umständen herausdenken, um zu verstehen, welch Gefühl grenzenloser Unsicherheit den Menschen befällt, der sich bedingungslos dem Schicksal übergibt. Selbst fruchtbar sein, heißt sich selber zerstören, denn mit dem Entstehen der folgenden Generation hat die vorausgehende ihren Höhepunkt überschritten; so werden unsere Nachkommen unsere gefährlichsten Feinde, mit denen wir nicht fertig werden, denn sie werden überleben und darum unfähig uns die Macht aus den entkräfteten Händen nehmen. Die Angst vor dem erotischen Schicksal ist ganz begreiflich, denn es ist etwas Unabsehbares daran; überhaupt birgt das Schicksal unbekannte Gefahren und das beständige Zögern des Neurotischen, das Leben zu wagen, erklärt sich unschwer aus dem Wunsche, abseits stehen zu dürfen, um nicht im gefährlichen Kampfe des Lebens mitringen zu müssen. (Jung, 1910: 218-219)

情熱的な欲望、つまりリビドーは二つの面がある。それはすべてを美化するが、ある状況にお

いてはすべてを破壊することもある力である。したがって激しい欲望はそれ自体すでに不安を伴うか、あるいは不安があとをついてくる。あるいは不安によって予告される、ということは理解できる。情熱は運命を惹き寄せ、取り消しようのないことをしてしまふ。また時の車輪をまわし、返却して身軽になるわけにはゆかない過去という荷を記憶に負わせる。運命に対する不安は分かります。運命とは見渡しがたい限界の知れないものであり、未知の危険を隠しているからである。神経症のひとが思いついて人生にぶつかることをためらうのも、危険な戦いにつきこまれないよう離れていたいという願望から、わけなく説明される。(ユング、1985:166、一部改訳)

冒頭でユングの指摘したリビードにおける破壊性の一面こそ、シュピールラインが自身の論文で主張したいと考えた発見であった。彼女の論文は次のような文言で締めくくられている。

Ich glaube aber, meine Beispiele zeigen genügend deutlich, daß, entsprechend den biologischen Tatsachen, der Fortpflanzungstrieb auch psychologisch aus zwei antagonistischen Komponenten besteht und demnach ebensogut ein Verfalls als ein Zerstörungstrieb ist. (Spielrein, 1912: 503)

だが、生物学的な事実に対応して、生殖の欲動は心理学的に言っても、二つの相対立する構成要素から成り立っており、したがって、破壊欲動としての生成欲動でもあるということは、わたしの挙げた例からだけでも、十分明らかであると信じる。(シュピールライン、1991: 411)

論文の発表された順番や、一学生に過ぎなかったシュピールラインと当時すでに分析家として評価されていたユングという実績の差から考えると、この革新的な発想はユングが思い付き、それをシュピールラインが後追いで題材として取り上げたかのように見える。しかし実際のところ、シュピールラインとユングは患者と主治医、精神分析を志す同志、そして不倫相手といった多重的な関係を持っており、その関係が両者へ同時的にこのリビードにおける破壊的な面といった考えをもたらしたようである(カロテヌート、1991)。フロイトは不本意な形で彼らの関係に巻き込まれることになるが、この発想に関しては特にシュピールラインに対して以下のように一定の評価を示している。

In einer inhalts- und gedankenreichen, für mich leider nicht ganz durchsichtigen Arbeit hat Sabina Spielrein ein ganzes Stück dieser Spekulation vorweggenommen. Sie bezeichnet die sadistische Komponente des Sexualtriebs als die "destruktive". (Die Destraktion als Ursache des Werdens. Jahrbuch für Psychoanalyse, IV, 1912.) (Freud, 1920: 59)

内容豊かで思想豊かであるが、残念ながらわたしには全面的理解はできない論文において、ザビーナ・シュピールラインはこうした思弁の一部をまるごと先取りしていた。彼女は性欲動のサディズム的成分を「破壊的」なものとして言い表している(「生成の原因としての破壊」Jahrbuch für Psychoanalyse, IV, 1912)。(フロイト、2006: 113)

その後、フロイトはこの“Destructionstrieb”(破壊欲動)を自らの理論のなかに組み入れている。それが詳しく論じられるのは、次に挙げた論文「自我とエス」(1923)においてである。

Die zweite Triebart aufzuzeigen, bereitete uns Schwierigkeiten; endlich kamen wir darauf, den Sadismus als Repräsentanten derselben anzusehen. Auf Grund theoretischer, durch die Biologie gestützter Überlegungen supponierten wir einen Todestrieb, dem die Aufgabe gestellt ist, das organische Lebende in den leblosen Zustand zurückzuführen, während der Eros das Ziel verfolgt, das Leben durch immer weitergreifende Zusammenfassung der in Partikel zersprengten lebenden Substanz zu komplizieren, natürlich es dabei zu erhalten. (...) In welcher Weise sich Triebe der beiden Arten miteinander verbinden, vermischen, legieren, wäre noch ganz unvorstellbar; daß dies aber regelmäßig und in großem Ausmaß geschieht, ist eine in unserem Zusammenhang unabweisbare Annahme. Infolge der Verbindung der einzelligen Elementarorganismen zu mehrzelligen Lebewesen wäre es gelungen, den odestrieb der Einzelzelle zu neutralisieren und die destruktiven Regungen durch Vermittlung eines besonderen Organs auf die Außenwelt abzuleiten. Dies Organ wäre die Muskulatur und der Todestrieb würde sich nun - ahrscheinlich doch nur teilweise - als Destruktionstrieb gegen die Außenwelt und andere Lebewesen äußern. (Freud, 1923a: 268-269)

これに対して、もう一方の種類の欲動は、はっきりそれと指し示すのがなかなかむずかしく、われわれとしては結局、サディズムを、この種の欲動の代理表現とみなすことになった。生物学に依拠した理論的考察にもとづいてわれわれが仮定したのは、有機的生命体を生命なき状態へ引き戻すことを使命としている死の欲動である。(…)この二種類の欲動が、いかなる仕方で結び合い、

混ざり合い、化合するのにかについては、今のところまだまったく想像もつかないが、しかしわれわれとしては、そうしたことが規則的かつ大規模に起こっているということを不可避の前提として論を進めるはかない。もしかしたら、原初の単細胞生物が互いに結び合って多細胞生物となった結果、個々の細胞に宿る死の欲動がうまく中和され、破壊的な蠢きが何らかの特別の器官を介して首尾よく外界へとそらされることになったのかもしれない。むしろこの特別の器官とは筋肉組織のことであって、とすれば死の欲動は——おそらくはその一部であろうが——外界ならびに他の生物を標的とする破壊欲動として姿を現わすということになる。(フロイト、2007a: 37-39)

フロイトはこのように自身が論文「快原理の彼岸」(1920)において死の欲動という概念を提唱したと、サディズムはその欲動の表れであるとしたことに触れたのち、破壊欲動という用語を持ち出して、それは有機体内に備わる死の欲動が外界や他の生物に向けられて表れたものであると論じた。

また、「自我とエス」(Freud, 1923)の翌年に発表した論文「マゾヒズムの経済論的問題」(Freud, 1924a)においては次のように外界や他の生物に向けられる以前の破壊欲動についても言及している。

Die Libido trifft in (vielfelligen) Lebewesen auf den dort herrschenden Todes- oder Destruktionstrieb, welcher dies Zellenwesen zersetzen und jeden einzelnen Elementarorganismus in den Zustand der anorganischen Stabilität (wenn diese auch nur relativ sein mag) überführen möchte. Sie hat die Aufgabe, diesen destruirenden Trieb unschädlich zu machen, und entledigt sich ihrer, indem sie ihn zum großen Teil und bald mit Hilfe eines besonderen Organisms, der Muskulatur,

nach außen ableitet, gegen die Objekte der Außenwelt richtet. Er heie dann Destruktionstrieb, Bemtigungstrieb, Wille zur Macht. Ein Anteil dieses Triebes wird direkt in den Dienst der Sexualfunktion gestellt, wo er Wichtiges zu leisten hat. Dies ist der eigentliche Sadismus. Ein anderer Anteil macht diese Verlegung nach auen nicht mit, er verbleibt im Organismus und wird dort mit Hilfe der erwhnten sexuellen Mitterregung libidins gebunden; in ihm haben wir den ursprnglichen, erogenen Masochismus zu erkennen. (Freud, 1924a: 376)

(多細胞)生物においてリビードは、細胞を支配する死の欲動あるいは破壊欲動にぶつかる。この欲動は細胞を破壊し、個々の基礎的有機体をすべて無機的静止状態(たとえこの静止状態が単に相対的なものであるとしても)へ移行させようとする。リビードは、この破壊欲動を無害なものにするという課題を背負い、そして、この破壊欲動の大部分を、ある特殊な器官系、すなわち筋肉の活動の助けによって外向きに転じさせ、外界の諸対象へと向かわせることによって、この課題から放免される。そういうわけでこの欲動は破壊欲動、制圧欲動、力への意志と呼ばれるのであろう。この欲動の一方の部分が直接に性的機能に奉仕させられ、そこで重要な役割を果たすことになる。これが本来のサディズムである。もう一方の部分は外へ移転されることなく、有機体内部に留まり、そこで先に述べた性的な共興奮によってリビード的に拘束される。その内にこそ本来の性源的マゾヒズムが認められるべきである。(フロイト、2007c: 292、一部改訳)

フロイトはこのように述べ、外界に向いている状態だけでなく、有機体内で欲動が働いている状態を指す用語としても破壊欲動を用いた。ただしここで彼が想定しているのは、外界へ向け変えきれずに有

機体内に留まり、苦痛と不快といった性的な興奮によって拘束された破壊欲動、つまりマゾヒズムである。

フロイトの提唱以降、破壊欲動という用語はウィルヘルム・ライヒ、フランツ・アレクサンダー、フェレンツイといった他の分析家たちによって散発的に言及されていく。破壊欲動はサディズム、マゾヒズムにおいて観察されうると述べたフロイトに則り、彼らにおいても同様の文脈で使用されている。また、ライヒは以下のようにてんかん発作に関する論文において、思弁的な概念である死の欲動ではなく観察可能な破壊欲動の方が実際の症例を論じる際に有用であると論じている。

Maeder, Stekel, Graven und Schilder hoben den Sadismus des epileptischen Charakters hervor und dazu paßt die sehr dunkel gehaltene Äußerung Freuds: „Wir erkennen, daß der Destruktionstrieb regelmäßig zu Zwecken der Abfuhr in den Dienst des Eros gestellt ist, ahnen, daß der epileptische Anfall Produkt und Anzeichen einer Triebentmischung ist...“, eine Äußerung, die verschiedene Auslegungen erfahren hat, darunter auch eine von Nun berg, der in einer Diskussion meinte, im epileptischen Anfall lebe sich der Todestrieb aus. Wir meinen, daß es vorteilhafter ist, bei der Diskussion klinischer Fragen den biologischhypothetischen Begriff des Todestriebes durch den eindeutigen klinischtheoretischen ‚Destruktionstrieb‘ zu ersetzen. Demnach wäre der epileptische Anfall als Ausdruck destruktiver Motorik aufzufassen, deren Vollzugsorgan die Muskulatur des Körpers ist. Ist also der epileptische Anfall ein pathologischer Organismus oder ein Akt destruktiver Motorik? (Reich, 1931: 273)

メーダー、シュテークル、グレイヴン、シルダーはてんかんの性格のサディズムを強調しており、このことは次のフロイトによる非常に曖昧な主張にあてはまる。「破壊欲動が放散をめざすことによってエロースに奉仕させられるのが通例であることが分かってくるばかりか、てんかん発作が欲動分離の産物ないし徴候ではないかとの予想も出てくるし……」。この主張にはさまざまな解釈がなされており、そのなかには、死の欲動がてんかん発作で活性化するという議論の中でヌンベルグによってなされた発言も含まれる。私たちは、臨床上の問題を議論する際には、生物学的に仮説的な死の欲動の概念を、明確な臨床理論上の「破壊欲動」に置き換える方が有利であると考ええる。したがって、てんかん発作は、身体の筋肉がその実行器官である破壊的な運動活動の発現としてみるべきである。てんかん発作は病的なオーガズムなのだろうか、それとも破壊的な運動活動なのだろうか。

こうした発言は、クラインが著書(1932)のなかで死の欲動よりもむしろ破壊欲動という用語を積極的に活用していたことから推察されるように、そういった考えが当時の分析家たちにとっての共通認識であった可能性を示唆している。

破壊欲動についてフロイトや他の精神分析家たちとクラインが異なっていた点は、彼女がそれを自らの臨床実践の場で目の当たりにしていた迫害的な感覚の説明材料として用いようと試みたことに由来する。たとえばフロイトは有機体に備わる死の欲動が破壊欲動として表れ、それによって有機体自身が破壊されることを阻止するために外部の対象へと向け変えられると論じ、自我から対象へ向かっていく外向きの破壊欲動に力点を置いた。一方でクラインは有機体自身に向けられた内向きの破壊欲動に注目し、

絶滅の恐怖の着想を得た。クラインにとって内向きの破壊欲動こそがもっとも重要であったという事実は、以下のような後年の発言からも窺い知ることができる。

I have tried to show in various connections that destructive impulses, the expression of the death instinct, are first of all felt to be directed against the ego. (Klein, 1975d: 223)⁽¹⁴⁾

これまで私は、死の欲動の表れである破壊欲動が、何よりもまず自我に対して向けられていると感じられるものであることを、さまざまな関連において明らかにすることに努めてきた。(クライン、1996: 72 一部改訳)

また、クラインの理論のなかでも破壊欲動が外部の対象へと向けられはするが、それはそもそも出生体験によって外的な世界が危険で迫害的なものであると自我に感じられるからだ。クラインは説明づけた。フロイトが破壊欲動を外に逸らすというとき、それは外部の対象に欲動を向けることを指すが、クラインにとっては次で述べられているように、自らの破壊欲動を外部の対象に投影することを意味するのである。

We may assume that the struggle between life and death instincts already operates during birth and accentuates the persecutory anxiety aroused by this painful experience. It would seem that this experience has the effect of making the external world, including the first external object - the mother's breast - appear hostile. To this contributes the fact that the ego turns the destructive

impulses against this primary object. The young infant feels that frustration by the breast, which in fact implies danger to life, is the retaliation for his destructive impulses towards it and that the frustrating breast is persecuting him. In addition he projects his destructive impulses on to the breast, that is to say, deflects the death instinct outwards; and in these ways the attacked breast becomes the external representative of the death instinct. (Klein, 1948: 117)

われわれは、生の欲動と死の欲動の相克はすでに出産のときに働いており、この苦痛な体験によって引き起こされる迫害的不安を強めると考えてもよいであろう。この体験は最初の外的対象すなわち母親の乳房を含めて外的な世界というものを、敵意を持つものだと感じさせる作用を持つようである。自我がこの初めての対象に対して破壊衝動を向ける事実がこのことを裏づける。小さな幼児は、乳房によって与えられる欲求不満は自分の乳房に対する破壊衝動のための報復であり、そして欲求不満にさせている乳房は彼を迫害しているのだと感じる。こうした乳房によって与えられる欲求不満というのは、事実上の生命に対する危険を意味している。さらに彼は自分の破壊衝動をその乳房へと投影する。すなわち死の欲動を外部へ逸らすのである。そしてこれらの方法によって攻撃された乳房は死の欲動の外的な代理物となる。(クライン、1985: 40-41、一部改訳)

こうして自らの破壊欲動を外部の対象に投影した結果、自我は再び迫害的な感覚を味わうことになる。クラインが死の欲動を以って表現しようとした世界観は、「(何者かに)迫害される」という感覚に基づいており、それはやはりフロイトの示した欲動論的な世界観とは異なる、初めから対象ありきのものであるといえる。

絶滅の恐怖から迫害不安、抑うつ不安へ

絶滅の恐怖および迫害不安の誕生

『児童の精神分析』を出版した一九三二年の時点でクラインは絶滅の恐怖の着想を得て、概念としてほとんど完成させていた。ただし、実際に絶滅の恐怖という用語によってこの概念を名指したのは、それから数年遅れて一九四六年に発表した論文「分裂的機制についての覚書」においてである。

I hold that anxiety arises from the operation of the Death Instinct within the organism, is felt as fear of annihilation (death) and takes the form of fear of persecution. The fear of the destructive impulse seems to attach itself at once to an object - or rather it is experienced as the fear of an uncontrollable overpowering object. Other important sources of primary anxiety are the trauma of birth (separation anxiety) and frustration of bodily needs; and these experiences too are from the beginning felt to be caused by bad objects. Even if these objects are felt to be external, they become through introjection internal persecutors and thus reinforce the fear of the destructive impulse within. (Klein, 1946: 100)

私が主張するのは、生体の内部において死の欲動の活動から生じる不安が、絶滅(死)の恐怖として感じられ、迫害不安という形をとることである。破壊欲動への恐怖は、直ちに対象に帰

せられるように見える。あるいはむしろ、支配不能で圧倒的な力を持つ対象に対する恐怖として体験されるのである。一次的な不安を生み出す他の重要な源泉は、出産外傷(分離不安)と、身体的欲求の挫折である。これらの体験もまた最初から、「悪い」対象によってひき起こされるものとして感じられる。これらの対象はたとえ外的なものとして感じられるにしても、取り入れを通して、内的な迫害者になり、内部で破壊欲動への恐怖を強化する。(クライン、1985: 78、一部改訳)

ここでは、死の欲動と絶滅の恐怖、そして迫害不安との関係が明確に記されている。死の欲動が絶滅の恐怖を引き起こし、それが乳児には対象から迫害される不安として感じられるのである。

こうして絶滅の恐怖は名前を持った概念として誕生したが、その後の論文に登場する箇所は数えるほどしかない。⁽¹⁵⁾ そのいずれもが次に挙げるような誕生の瞬間から乳児の味わう不安を論じる文脈のなかで登場する。

At the beginning of post-natal life the infant experiences anxiety from internal and external sources. I have for many years held the view that the working of the death instinct within gives rise to the fear of annihilation and that this is the primary cause of persecutory anxiety. The first external source of anxiety can be found in the experience of birth. This experience, which, according to Freud, provides the pattern for all later anxiety-situations, is bound to influence the infant's first relations with the external world. It would appear that the pain and discomfort he has suffered, as well as the loss of the intra-uterine state, are felt by him as an attack by hostile forces, i.e. as

persecution. Persecutory anxiety, therefore, enters from the beginning into his relation to objects in so far as he is exposed to privations. (Klein, 1975b: 61-62)⁽¹⁶⁾

生まれた時から幼児は、内外の原因によって不安を体験する。長年のあいだ私は、内にある死の欲動の作用によって絶滅の恐怖が引き起こされ、この死の欲動の作用が迫害的な不安の第一義的な原因であると考えてきた。不安を引き起こす最初の外的な原因は出産体験に見いだされる。フロイトによれば、出産体験はその後の不安状態すべてに共通する形体を備えている。そして、この体験は、幼児と外的世界との最初の関係に影響を与える。幼児の受ける苦痛や不快、またそれらと同じく子宮内状態の喪失は、敵意に満ちた力に攻撃されること、すなわち、迫害されることとして幼児に感じとられるように思える。したがって、幼児が困苦にさらされる限りにおいて、迫害的な不安は彼と対象との関係のなかに初めから生じるのである(クライン、1985: 77-78、一部改訳)

このようにクラインは乳児の内側と外側それぞれに最早期の不安の源泉があると考えた。不安の内なる源泉は死の欲動であり、それによって生じる絶滅の恐怖をクラインはより根本的な不安であると論じた。一方で乳児の外側に存在する不安の源とは、快適な子宮内環境から放り出されてしまうという出生体験であり、後に生じる空腹などの乳児の欲求が満たされない状況である。これらの体験によって乳児は外的な世界を敵意に満ちたものとして感じるようになるのである。

迫害不安から抑うつ不安へ

最後に、クラインの提唱した不安概念のうち、これまで触れていなかった抑うつ不安の誕生に言及し、それと絶滅の恐怖との違いを明示することで本論を締めくくる。クラインが最終的に提唱した不安の概念は絶滅の恐怖、迫害不安、抑うつ不安の三つがあり、抑うつ不安は前者二つを経た最終形態にあたる。ただしこれら三つの不安は必ずしも不可逆的なものではなく、行きつ戻りつする可能性があることに留意されたい(松木、2021)。

クラインは絶滅の恐怖、迫害不安の概念化に成功したのち、その次の段階となる不安形態へと思索を進めた。死の欲動を導入してから三年後に発表した論文「躁うつ状態の心因論に関する寄与」(1935)では、不安を迫害的なものと抑うつ的なものへと大別することに取り組んでいる。この頃すでに神経症を示す子どもに留まらず広範な患者を対象に精神分析を行っていたクラインは、以下の通り論文の冒頭でそれらの実践から得られた知見をもとに理論を構築したと述べている。また論文発表の前年にはクライン自身が何度目かの重いうつ状態に陥っていたようである(Melanie Klein Trust, n.d.-a)。

I have acquired the material upon which my conclusions are based from the analysis of depressive states in cases of severe neuroses, border-line cases and in patients, both adults and children, who displayed mixed paranoid and depressive trends. (Klein, 1935: 146)

私の結論のもとになった材料は、重度の神経症、境界例、および妄想傾向と抑うつ傾向とが混在した状態にある大人と子どもの患者における抑うつ状態を分析することで得られたものである。

(クライン、1983: 22' 一部改記)

この論文でクラインは、不安には迫害的なものと抑うつ的なものがあるという結論を前提としている。それらが生じるまでの子どもの心的発達はそのような道のりを辿る。

The development of the infant is governed by the mechanisms of introjection and projection. From the beginning the ego introjects objects 'good' and 'bad', for both of which its mother's breast is the prototype - for good objects when the child obtains it and for bad when it fails him. But it is because the baby projects its own aggression on to these objects that it feels them to be 'bad' and not only in that they frustrate its desires: the child conceives of them as actually dangerous - persecutors who it fears will devour it, scoop out the inside of its body, cut it to pieces, poison it - in short, compassing its destruction by all the means which sadism can devise. These imagos, which are a phantastically distorted picture of the real objects upon which they are based, are installed by it not only in the outside world but, by the process of incorporation, also within the ego. (Klein, 1935: 145)

幼児の心的発達は、取り入れと投影の機制で支配されている。最初から、自我は対象を「よい」対象と「悪い」対象として取り入れる。そのどちらも母親の乳房がその原型となっている。つまり、乳房をうまく得ているときは「よい」対象として、そうでないときには「悪い」対象としてみなされるのである。しかし、赤ん坊に対象が「悪い」と感じられるのは、赤ん坊の願望を対象が挫折させるからだけではなく、赤ん坊自身の攻撃性を対象へと投影するからである。赤ん坊は

対象を実際に危険な存在だとみなしている。すなわち、赤ん坊が恐れる迫害者は、赤ん坊を貪り、その身体の内부를吸い尽し粉々にし、だめにする、要するにサディズムが行使するあらゆる手段をもってその破壊を企てる者なのである。こうしたイマージは赤ん坊が基盤としている現実の対象の空想的に歪曲された心像であるが、それは、外界の中に布置されるようになるのみならず、体内化の過程によって自我の内部においても布置されるようになる。(クライン、1983: 21、一部改訳)

まず乳児は取り入れの機制を通じて、自らに満足を与えてくれる「よい」対象と、逆に不満を与えてくる「悪い」対象とを自我のなかに取り入れる。具体的には自らの空腹を満たしてくれる母親の乳房が「よい」対象にあたり、逆に、空腹時に現れず自らに飢餓感を与えてくる母親の乳房が「悪い」対象にあたる。この時点における乳児には対象としての母親が全体的な存在として認識されていない。そして「悪い」対象が取り入れられた結果、それは乳児にとって外的に存在するだけでなく自らの内部にも存在するようになる。ただでさえ迫害的な存在である「悪い」対象は、乳児が自らの攻撃性を投影することにより、一層その破壊性を増して乳児に脅威を感じさせるようになる。この迫害者に対する恐れが乳児の体験する迫害的な不安である。

先に述べた通り、乳児には対象が全体的な存在として認識されていないが、これは乳児自身の自我についてもいえることである。このことについてクラインは次のようにエドワード・グラバーを参照し、乳児には自我の核とでもいふべきものがばらばらの状態で存在していると説明した。⁽¹⁷⁾

If we take this view of infantile history, it is obvious that not only the adult ego but the ego of a child of five, however well organized, is essentially a composite. This can be supported by theoretical considerations which I have elaborated elsewhere, viz., that any psychic system which (a) represents a positive libidinal relation to objects or part objects, (b) can discharge reactive tension (i.e., aggression and hate against objects), and (c) in one or other of these ways reduces anxiety, is entitled to be called an ego system or ego-nucleus. Thus an oral system gratifies instinct on a part-object (mother's nipple) ; it can exert aggression towards the nipple (sucking, pulling, biting), and it is able to prevent some degree of anxiety. This is the model or prototype of an independent autonomic primitive ego-nucleus. Applying this system to the conception of a series of primacies, it seems reasonable to conclude that the primitive ego, from at any rate the age of one year onwards, is polynuclear, in the sense of a series of comparatively independent organizations (...) (Glover, 1932: 825-826)

幼児の歴史についてこのような見方をすると、大人の自我だけでなく五歳の子どもの自我も、たとえ十分に組織化されていたとしても、本質的に複合体であることは明らかである。これは私が別の場所で詳しく説明した理論的考察によって裏付けられる。つまり、(a)対象または部分対象に対するポジティヴなリビド的関係を表し、(b)反応性の緊張(つまり、対象に対する攻撃性や憎悪)を放出でき、そして(c)これらの方法のいずれかで不安を軽減する精神的なシステムは、自我システムまたは自我核と呼べるだろう。口腔システムは部分対象(母親の乳首)に対する本能を満足させるものであり、乳首に対して攻撃(吸う、引っ張る、噛む)を加え、ある程度の不安を防ぐこと

ができる。これは、独立した自律的な原始自我核のモデルまたはその原型といえる。このシステムを一連の優位性の概念に適用すると、原始的な自我は、少なくとも一歳以降は、一連の比較的独立した組織という意味で多核的であると結論づけるのが合理的と思われる。

このようにばらばらと別個に存在していた自我の核は、次第に心的発達に伴って一つにまとまり始める。そして次に述べられているように、自我が組織化していくにつれて、対象もまたひとまとまりの存在であることが乳児に少しずつ認識されるようになっていく。

As the ego becomes more fully organized, the internalized imagos will approximate more closely to reality and the ego will identify itself more fully with 'good' objects. The dread of persecution, which was at first felt on the ego's account, now relates to the good object as well and from now on preservation of the good object is regarded as synonymous with the survival of the ego. Hand in hand with this development goes a change of the highest importance, namely, from a partial object-relation to the relation to a complete object. Through this step the ego arrives at a new position, which forms the foundation of that situation called the loss of the loved object. Not until the object is loved as a whole can its loss be felt as a whole. (Klein, 1935: 147)

自我がより組織化されるにつれて、内在化されたイマージは現実により近づき、自我はより十分に「よい」対象と同一視しようとする。最初は自我に対してのみ感じられていた迫害への恐れは、今やよい対象にも同様に結びつき、そして、それから以後は「よい」対象の保護が自我の生存と

同義とみなされるようになる。／こうした発達に伴って、もっとも重要な変化が生じる。すなわち、部分的な対象関係から完全な対象との関係への変化である。この段階を通じて、自我は新たな態勢に到達する。この態勢では、愛情対象の喪失と呼ばれる状況の基盤が形成される。対象が全体として愛されるようになるまでは、愛情対象の喪失が全体としての喪失として感じられないのである。(クライン、1983: 23、一部改訳)

自我と同様に対象も全体的な存在として認識することが可能になるこの段階において、自我はより一層「よい」対象との同一視を強めていく。そのため、自我と同じく「よい」対象も迫害者の攻撃から守られなければならない存在になる。しかしながら、「よい」対象を取り入れる先である自我の内部には、同様に迫害者である「悪い」対象も取り入れられており、そのことが以下のように自我にとっての葛藤を生み出す。

In my experience there is, furthermore, a deep anxiety as to the dangers which await the object inside the ego. It could not be safely maintained there, as the inside is felt to be a dangerous and poisonous place in which the loved object would perish. Here we see one of the situations which I have described as being fundamental for 'the loss of the loved object', the situation, namely, when the ego becomes fully identified with its good, internalized objects, and at the same time becomes aware of its own incapacity to protect and preserve them against the internalized, persecuting objects and the id. (Klein, 1935: 148)

さらにまた、私の経験からいうと、自我内部の対象を待ち受けている危険にまつわる深刻な不安が存在する。その内部は愛する対象が滅亡してしまうような危険で有害な場所だと感じられるので、そこでは対象が安全に維持されたいのである。ここに、私たちは、「愛情対象の喪失」の基礎となるような、私が上述した状況の一つを見るのである。すなわち、それは、自我がその内在化された「よい」対象に完全に同一視し、同時に内在化された迫害対象とイドから「よい」対象を守り保存することの無能さに気づかされるときの状況である。(クライン、1983: 24-25、一部改訳)

I have already stated that my experience has led me to conclude that the loss of the loved object takes place during that phase of development in which the ego makes the transition from partial to total incorporation of the object. Having now described the situation of the ego in that phase, I can express myself with greater precision on this point. The processes which subsequently become defined as 'loss of the loved object' are determined by the subject's sense of failure (during weaning and in the periods which precede and follow it) to secure his good, internalized object, i.e. to possess himself of it. One reason for his failure is that he has been unable to overcome his paranoid dread of internalized persecutors. (Klein, 1935: 150)

すでに述べてきたように、私が経験から得た結論は、自我が対象との部分的体内化から全体的体内化へと移行するその発達時期に愛する対象の喪失が起こる、ということである。この時期の自我の状況を記載してみると、私はこの点に関してはずっと正確に述べることができる。「愛情対

象の喪失」としてその後明らかとなっていく諸過程は、(離乳期間中およびそれに前駆する期間と後に続く期間において)主体が「よい」内在化された対象を守ること、すなわち、それを自分のものとすることに失敗している、という主体の感覚によって決定されている。この主体の失敗の一つの理由は、内在化された迫害者への妄想的恐怖を克服できていないことである。(クライン、1983: 27、一部改訳)

こうして自我はその内部において「よい」対象を迫害者である「悪い」対象から守りきる必要性に駆られるが、この時点でその「悪い」対象への恐れを完全に克服できてはいない。そのため「よい」対象を守ることができるという自信を喪失し、抑うつ的な不安を味わうはめになる。

抑うつ的な不安とはつまり、クラインが以下にまとめているように「よい」対象を迫害的な危険に曝してしまうという不安であり、自らの力不足によって迫害者から守れずに「よい」対象を失ってしまうかもしれないという不安である。

It now becomes plain why, at this phase of development, the ego feels itself constantly menaced in its possession of internalized good objects. It is full of anxiety lest such objects should die. Both in children and adults suffering from depression, I have discovered the dread of harbouring dying or dead objects (especially the parents) inside one and an identification of the ego with objects in this condition. (Klein, 1935: 149-150)

この発達時期になると、自我自身が内在化された「よい」対象をもっていることに常に脅威と感

じる理由が明確となる。それは、かかる対象が死ぬのではないかという不安に満たされているからである。私は、抑うつに悩む子どもと大人ではともに、死につつありまたは死んでしまった対象(特に両親)を心の内に抱くことへの恐れと、そうした状態にある対象と自我との同一化があるのを見てきた。(クライン、1983: 26、一部改訳)

Let us take inhibitions and anxieties about food in this connection. (...) the anxiety of destroying the external good objects by biting and chewing, or of endangering the internal good object by introducing bad substances from outside into it will be depressive. Again, the anxiety of leading an external good object into danger within oneself by incorporating it is a depressive one. (Klein, 1935: 156)

これに関連して、食べ物についての制止や不安を取り上げてみよう。(…)かみ砕くことによって外部の「よい」対象を破壊することへの不安、または外部の「悪い」物質を内部の「よい」対象へ持ちこむことによってそれを危険に曝してしまうことへの不安は抑うつのものであろう。さらに、外部の「よい」対象を個人の内部に合体化することによって、危険に導くことへの不安も抑うつのものである。(クライン、1983: 33-34、一部改訳)

このように、抑うつ不安は自責的な感覚に基づいており、その点で被害的な感覚に基づいた絶滅の恐怖や迫害不安とは一線を画すものである。

おわりに

本論では、クラインは最早期の不安である絶滅の恐怖という概念をいかにして生み出したのか、その経緯を彼女自身や彼女に影響を与えた人物の原文にあたることを通じて明らかにした。精神分析家として活動を始めたばかりの頃、クラインは不安をそれほど重要視していなかった。彼女の主眼はあくまで夜驚症や制止といった神経症の症状除去に置かれており、不安の解消がそういった症状除去につながることから、クラインは不安を症状除去に有用な手段としてしか捉えていなかったのである。また、不安という概念に対する思索を深めることはせず、フロイトの提唱した去勢不安を常に前提としていた。それから新たな師であるアーブラハムに影響を受け、さらに児童分析の臨床実践を積んでいくなかで子どもを示す不安の内実に迫り始める。そうして子どもは両親に対する攻撃的な欲求を持っており、それを空想上で発揮するために報復を恐れて不安を抱くこと、報復の主体である両親像(超自我)は子どもにとって非常に過酷な性格を持つことを確信するようになった。この頃になるとエディプス・コンプレックスや超自我の発生時期に関するクラインの見解は、フロイトの理論ではもはや説明がつかなくなっていく。そこでクラインは他の精神分析家たちからはば捨て置かれていた死の欲動の概念を自らの理論に導入した。死の欲動は超自我形成の起爆剤であると説明づけるなかで、超自我から迫害される以前の不安、死の欲動が有機体自身に向けられた原初的狀態で味わう不安である絶滅の恐怖を見出すに至った。こうした前例に依らない不安概念の創出は、発想として先に生まれていた迫害不安とその後の形態としての抑うつ不安の創出に続いていく。

また、こうした経緯を辿るなかで、クラインにとっての死の欲動とは内向きに働く破壊欲動であることが私たちの知るところとなった。自らに向く破壊欲動という概念は、フロイトを介して死の欲動に転ずる前のシュピールラインが唱えた破壊欲動に通じている。ただしシュピールライン、フロイトと異なり、クラインがその概念を導入したのは「(何者かから)迫害される」という感覚、対象の存在を前提とする世界観にもとづいてのことであった。

最後に、こうして生まれた絶滅の恐怖という概念が現代に至るまでの間どのようにして統合失調症や自閉スペクトラム症の理解に寄与してきたのか、クラインよりも後世の精神分析家たちに活用されてきたかについては検討の余地が残る。先にも述べた通り、クライン自身が絶滅の恐怖という用語を論文内に持ち出した回数はそれほど多くなく、そのなかでも具体的な症例に交えて論じている箇所は数えるほどしかない。それにも関わらずこの概念はその後の分析家たち、たとえばビオン、スィーガル、シドニー・クラインやドナルド・ウィニコット、タスティンらによって議論が続けられている。そうした検討の歴史を今後紐解いていくにあたり、本論で明らかにした概念誕生の経緯とそれを裏打ちする原文への立ち返りは、その成果に少なからず貢献するものと考ええる。

(二〇二四年度京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了)

参考文献

- Abraham, K. (1924). Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido auf Grund der Psychoanalyse seelischer Störungen. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (K・レーブラハム／下坂幸三・前野光弘・大野美都子〔訳〕(1993). 「心的障害の精神分析に基づくレビュー」『発達史試論』『レーブラハム論文集』岩崎学術出版社, pp. 19-97.)
- Aguiar, J. (1997). Historicising The Origins Of Kleinian Psychoanalysis. The International Journal of Psychoanalysis, 78, 1165-1182.
- Alexander, F. (1929). Strafbefürfnis und Todestrieb. Internationale Zeitschrift Für Psychoanalyse, 15 (2-3), 231-245.
- American psychoanalytic association. (n.d.). Noted Psychoanalysts. American Psychoanalytic Association (<https://web.archive.org/web/20071219013642/http://www.apsa.org/AboutPsychoanalysis/NotedPsychoanalysts/tabid/>) (最終閲覧日：二〇二四年一月二三日)
- Bion, W. (1958). On Arrogance. The International Journal of Psychoanalysis, 39, 144-146.
- Donaldson, G. (1996). Between Practice and Theory: Melanie Klein, Anna Freud and The Development of Child Analysis. Journal of the History of the Behavioral Sciences, 32, 160-176.
- Federn, P. (1913). Sabina Spielrein: Die Destruktion Als Ursache Des Werdens. Internationale Zeitschrift Für Psychoanalyse, 1(1), 89-93.
- Ferenczi, S. (1926). Das Problem der Unlustbejahung. Internationale Zeitschrift Für Psychoanalyse,

12(3), 241-252.

Freud, A. (1929). Einführung in Die Technik Der Kinderanalyse (Zweite, vermehrte Auflage). Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (㍀・フロイト／岩村由美子・中沢たけ子[訳](1981). 『フンナ・フロイト著作集㍀ー』岩崎学術出版社)

Freud, S. (1905). Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie II. Die infantile Sexualität. Gesammelte Werke, 5, 73-107. (㍀・フロイト／渡邊俊之[責任編集]渡邊俊之[訳](2009). 「性理論のための三篇」『フロイト全集㍀六』岩波書店, pp. 163-310.)

Freud, S. (1915a). Triebe und Triebsschicksale. Gesammelte Werke, 10, 210-232. (㍀・フロイト／新宮一成[責任編集]新宮一成[訳](2010a). 「欲動と欲動運命」『フロイト全集㍀一四』岩波書店, pp. 167-193.)

Freud, S. (1915b). Die Verdrängung. Gesammelte Werke, 10, 248-261. (㍀・フロイト／新宮一成[責任編集]新宮一成[訳](2010b). 「抑圧」『フロイト全集㍀一四』岩波書店, pp. 195-209.)

Freud, S. (1915c). Das Unbewusste. Gesammelte Werke, 10, 264-303. (㍀・フロイト／新宮一成[責任編集]新宮一成[訳](2010c). 「無意識」『フロイト全集㍀一四』岩波書店, pp. 211-254.)

Freud, S. (1917). Vorlesung: Die Angst. Gesammelte Werke, 11, 407-426. (㍀・フロイト／新宮一成・齋田清一[責任編集]新宮一成・高田珠樹・須藤訓任・道籙泰三[訳](2012). 「精神分析入門講義 第二十五講 不安」『フロイト全集㍀一五』岩波書店, pp. 469-493.)

Freud, S. (1920). Jenseits des Lustprinzips. Gesammelte Werke, 13, 3-69. (㍀・フロイト／須藤訓任[責任編集]須藤訓任[訳](2006). 「快原理の彼岸」『フロイト全集㍀一七』岩波書店, pp. 53-125.)

Freud, S. (1923a). Das Ich und das Es. Gesammelte Werke, 13, 237-289. (㍀・フロイト／本間直樹[責任編

- 集]道籙泰三[訳](2007a)。「自我とエゴ」『フロイト全集〈一八〉』岩波書店, pp. 1-62.)
- Freud, S. (1923b). Die infantile Genitalorganisation. *Gesammelte Werke*, 13, 293-298. (S. フロイト／本間直樹[責任編集]本間直樹[訳](2007b). 「幼児期の性器的編成(性理論に関する追加)」『フロイト全集〈一八〉』岩波書店, pp. 233-238.)
- Freud, S. (1924a). Das ökonomische Problem des Masochismus. *Gesammelte Werke*, 13, 371-383. (S. フロイト／本間直樹[責任編集]本間直樹[訳](2007c). 「マニエリスムの経済論的問題」『フロイト全集〈一八〉』岩波書店, pp. 287-300.)
- Freud, S. (1924b). Der Untergang des Ödipuskomplexes. *Gesammelte Werke*, 13, 395-402. (S. フロイト／本間直樹[責任編集]太寿堂真[訳](2007d). 「エディプスコンプレックスの没落」『フロイト全集〈一八〉』岩波書店, pp. 301-309.)
- Freud, S. (1926). Hemmung, Symptom und Angst. *Gesammelte Werke*, 14, 113-205. (S. フロイト／加藤敏[責任編集]大宮勘一郎・加藤敏[訳](2010). 「制止『症状』不安」『フロイト全集〈一九〉』岩波書店, pp. 9-101.)
- Glover, E. (1932). Psycho-Analytic Approach to the Classification of Mental Disorders. *Journal of Mental Science*, 78 (323), 819-842.
- Jung, C. G. (1910). Wandlungen und Symbole der Libido. *Jahrbuch für Psychoanalytische und Psychopathologische Forschungen*, 3(1), 120-227. (C. G. ヲング／秋山とと子・野村美紀子[訳](1985). 『変容の象徴——精神分裂病の前駆症状』筑摩書房)
- Klein, E. (1951). Johan H. W. Van Ophuijsen. *The International Journal of Psychoanalysis*, 32, 134-135.

- Klein, M. (1923). Zur Frühanalyse. *Imago*, 9 (2), 222-259. (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳] (1983). 「早期分析」『メラニー・クライン著作集〈一〉』誠信書房, pp. 91-124.)
- Klein, M. (1926). Die psychologischen Grundlagen der Frühanalyse. *Imago*, 12(2-3), 365-376. (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳] (1983). 「早期分析の心理学的原則」『メラニー・クライン著作集〈一〉』誠信書房, pp. 151-164.)
- Klein, M. (1927). Symposium on Child-Analysis. *The International Journal of Psychoanalysis*, 8, 339-370. (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳] (1983). 「児童分析に関するシンポジウム」『メラニー・クライン著作集〈一〉』誠信書房, pp. 165-204.)
- Klein, M. (1928). Frühstadien des Ödipuskonfliktes. *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 14 (1), 65-77. (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳] (1983). 「エディプス葛藤の早期段階」『メラニー・クライン著作集〈一〉』誠信書房, pp. 225-238.)
- Klein, M. (1929). Infantile Anxiety-Situations Reflected in a Work of Art and in the Creative Impulse. *The International Journal of Psychoanalysis*, 10, 436-443. (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳] (1983). 「芸術作品および創造的衝動に表われた幼児期不安状況」『メラニー・クライン著作集〈一〉』誠信書房, pp. 253-264.)
- Klein, M. (1930). Die Bedeutung der Symbolbildung für die Ichentwicklung. *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 16 (1), 57-72. (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳] (1983). 「自我の発達における象徴形成の重要性」『メラニー・クライン著作集〈一〉』誠信書房, pp. 265-282.)
- Klein, M. (1932). *Die Psychoanalyse des Kindes*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (M・クライン

- ／小此木啓吾・岩崎徹也[責任編訳]衣笠隆幸[訳](1997).『メラニー・クライン著作集〈二〉』誠信書房
- Klein, M. (1933). "The Early Development of Conscience in the Child" (German Version). Wellcome Collection. (<https://wellcomecollection.org/works/x6kb5p2q>) (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳]安岡誉[訳](1983).「子どもの心における良心の早期発達」『メラニー・クライン著作集〈三〉』誠信書房, pp. 3-14.)
- Klein, M. (1935). A Contribution to the Psychogenesis of Manic-Depressive States. The International Journal of Psychoanalysis, 16, 145-174. (M・クライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳]安岡誉[訳](1983).「躁うつ状態の心因論に関する寄与」『メラニー・クライン著作集〈三〉』誠信書房, pp. 21-54.)
- Klein, M. (1946). Notes on Some Schizoid Mechanisms. The International Journal of Psychoanalysis, 27, 99-110. (M・クライン／小此木啓吾・岩崎徹也[責任編訳]狩野力八郎・渡辺明子・相田信男[訳](1985).「分裂的機制についての覚書」『メラニー・クライン著作集〈四〉』誠信書房, pp. 3-32.)
- Klein, M. (1948). A Contribution to the Theory of Anxiety and Guilt. The International Journal of Psychoanalysis, 29, 114-123. (M・クライン／小此木啓吾・岩崎徹也[責任編訳]杉博[訳](1985).「不安と罪悪感の理論について」『メラニー・クライン著作集〈四〉』誠信書房, pp. 33-54.)
- Klein, M. (1950). On the Criteria for the Termination of a Psycho-Analysis. The International Journal of Psychoanalysis, 31, 78-80.
- Klein, M. (1952a). The Origins of Transference. The International Journal of Psychoanalysis, 33, 433-438.
- Klein, M. (1952b). The Mutual Influences in the Development of Ego and Id. The Psychoanalytic Study of

the Child, 7, 51-53.

Klein, M. (1958). On the Development of Mental Functioning. The International Journal of Psychoanalysis, 39, 84-90.

Klein, M. (1975a). Criminal Tendencies in Normal Children. The Writings of Melanie Klein Volume I Love, Guilt, and Reparation and Other Works 1921-1945. The Free Press, pp. 170-185. (㊦・㊦ライン／西園昌久・牛島定信[責任編訳](1983). 「正常な子どもにおける犯罪傾向」『メラニー・クライン著作集〈一〉』誠信書房, pp. 205-224.)

Klein, M. (1975b). Some Theoretical Conclusions Regarding the Emotional Life of the Infant. The International Psycho-Analytical Library, 104, 61-93. (㊦・㊦ライン／小此木啓吾・岩崎徹也[責任編訳]佐藤五十男[訳](1985). 「幼児の情緒生活について」『三の理論的結論』『メラニー・クライン著作集〈四〉』誠信書房, pp. 77-116.)

Klein, M. (1975c). On Identification. The International Psycho-Analytical Library, 104, 141-175.

Klein, M. (1975d). Envy and Gratitude. The International Psycho-Analytical Library, 104, 176-235. (㊦・㊦ライン／小此木啓吾・岩崎徹也[責任編訳](1996). 「羨望と感謝」『メラニー・クライン著作集〈五〉』誠信書房, pp. 3-90.)

Klein, H. S. (1974). Transference and Defence in Manic States. The International Journal of Psychoanalysis, 55, 261-268.

May, U. (2022). We are looking deeper than Freud... On the departure from the primacy of the sexual in Berlin and London between 1920 and 1925. The International Journal of Psychoanalysis, 103(2),

328-349.

Meisel, P. & Kendrick, W. (1986). Bloomsbury/Freud: The Letters of James and Alix Strachey, 1924-25. Chatto & Windus.

Melanie Klein Trust. (n.d.-a). Klein's Life: A Timeline. Melanie Klein Trust. (<https://melanie-klein-trust.org.uk/timeline/>) (最終閲覧日：二〇二四年一月二三日)

Melanie Klein Trust. (n.d.-b) Key Figures. Melanie Klein Trust. (<https://melanie-klein-trust.org.uk/key-figures/>) (最終閲覧日：二〇二四年一月二三日)

Reich, W. (1931). Über den epileptischen Anfall. Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse, 17 (2), 263-275.

Schaber, G. (1939). Die Theorie des Willens in der Psychologie von Ludwig Klages. Triltsch Verlag.

Segal, H. (1972). A Delusional System as a Defence Against the Re-Emergence of a Catastrophic Situation. The International Journal of Psychoanalysis, 53, :393-401.

Spielrein, S. (1912). Die Destruktion als Ursache des Werdens. Jahrbuch für Psychoanalytische und Psychopathologische Forschungen, 4 (1), 465-503. (の・ん・じゅー・ん・てん・へん／根本語彙「語」(1991). 「形成の原因としての破壊」『秘密のシムスター——フロイト・シムスター・メン』みちず書房, pp. 363-413.)

Star, D. (2018). The Death Drive in Psychoanalysis: Decoding Three Prominent Theories from Spielrein, Freud and Klein. Carleton University. (<https://repository.library.carleton.ca/concern/etds/r494vk965>) (最終閲覧日：二〇二四年一月二三日)

D・W・ウィニコット／牛島定信[訳](1977).『情緒発達の精神分析理論——自我の芽ばえと母なるもの』岩崎学術出版社

A・カロテヌート／入江良平・村本詔司・小川捷之[訳](1991).『秘密のシンメトリー——フロイト、シュピールライン、ユング』みすず書房

J・R・グリーンバーグ、S・A・ミッチェル／横井公一[監訳]大阪精神分析研究会[訳](2014).『精神分析理論の展開——〈欲動〉から〈関係〉へ』ミネルヴァ書房

下司晶(1999).「アンナ・フロイトーメラニー・クライン論争——精神分析の分岐点としての児童分析」『教育哲学研究』(79), 93-109. 教育哲学会

H・スィーガル／岩崎徹也[訳](1977).『メラニー・クライン入門』岩崎学術出版社

F・タステイン／斎藤久美子[監修]平井正三[監訳]辻井正次他[訳](2005).『自閉症と小児精神病』創元社

丹羽郁夫(2014).「最初の児童分析家ヘルミーネ・フーク＝ヘルムートの児童分析の技法」『現代福祉研究』14, 73-94. 法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

W・R・ビオン／福本修[訳](1999).『精神分析の方法I——セブン・サーヴァンツ』法政大学出版局

R・D・ヒンシェルウッド／衣笠隆幸[総監訳]福本修・奥寺崇・木部則雄・小川豊昭・小野泉[監訳](2014).『クライン派用語事典』誠信書房

福本修(2024).「ポスト・クライニアンによる心の原基の探究——フランセス・タステイン『神経症患者における自閉的障壁』」(<http://home.u02.itscom.net/fukumoto/hp/shyohyo/archives/imag093-3.html>)(最終閲覧日：2024年12月23日)

最終閲覧日：2024年12月23日

松本邦裕(2021).『体系講義対象関係論(上)——クラインの革新とビオンの継承的深化』岩崎学術出版社
J・ラブランシュ、J＝B・ポントリス／村上仁「監訳」(1977).『精神分析用語辞典』みすず書房

- (1) クラインはフロイトと同時代を生きており、彼女が三歳のときに当時二十九歳のフロイトはバリにいるシャルコーのもとを訪れている。また、フロイトの末娘であり、後に舌戦を交える仲となるアンナとはほぼ同年代で、アンナがクラインの七歳下にあたる。
- (2) クラインはその後、仲の良かった長姉を四歳で、父を十八歳で、敬愛する兄を十九歳で亡くしている。特に兄の死はクラインの精神状態に大きな影響を与えた。また父親の死後に未亡人として暮らしていた母親を自宅に引き取るも、その母もクラインが三十二歳のときに逝去している(Melanie Klein Trust, n.d.-a)。
- (3) クラインはなかでも精神医学に興味を惹かれていたようである。この時点で大学進学を目的とした教育機関であるギムナジウムへの入学試験に合格しており、実力は十分に備えていたといえる(Melanie Klein Trust, n.d.-a)。
- (4) クラインは精神分析に出会うまでに、神経治療として炭酸泉浴を行ったり、治療内容は定かではないがスイスにある療養所まで出向いたりしていた(Melanie Klein Trust, n.d.-a)。
- (5) フーク＝ヘルムートはクラインと同じく女性分析家という少数派に属していたが、フロイトも学んだウィーン大学で放射能を研究して博士号を取得しており、さらにはハプスブルク帝国時代の貴族の末裔でもあって、出自の知れないクラインとは他の分析家から受ける扱いも違っていたことが予想される。またフーク＝ヘルムートは分析家が患者である子どもにとって教育者であるべきと考えており、相手が子どもであっても大人と同様に一患者として接するクラインとは意見を異にしている。ただし、クラインが活動を始めてから数年後にフーク＝ヘルムートは患者でもあった甥に殺害されてしまったため、両者の対決が表面化する日は訪れなかった(丹羽、2014)。
- (6) ドイツ語で書かれた原文が入手できなかったため、例外的に英訳版を記載する。論文自体の発表年は一九二七年である。
- (7) ヨハン・H・W・ヴァン・オプホイセンはオイゲン・ブロイラーに学んで精神分析家を志し、オランダ精神分析協会の設立に尽力して七年の間その会長職を務めた人物である(Klein, E., 1951)。
- (8) このクエスチョンマークは原文からそのまま引用している。アウグスト・アイヒホルンは長年教師として働いていたが、ア

- シナ・フロイトによって見出されてウィーン精神分析協会の会員となり、教師としての経験を活かして協会における児童指導サービスを開設した人物である(American Psychoanalytic Association, n.d.)。
- (9) Aguayo(1997)の主張するところによると、ジョーンズは自身の精神分析家としての実力がフロイトに遠く及ばなかったため、形勢逆転を狙って獨創性に富んだクラインを登用しようである。実際、クラインはイギリスに移住した一九二六年にジョーンズから彼の妻と二人の子どもの精神分析を依頼されており、ジョーンズのクラインにかける期待の大きさが窺える(Melanie Klein Trust, n.d.-a)。
- (10) フロイトが初めて“Destruktionstrieb”という用語を持ち出した論文「自我とエス」(1923)において、それに「破壊欲動」という訳語があてられているため本論でもこの訳語を採用する。
- (11) 同じく「自我とエス」(Freud, 1923)に“destruktive Regungen”という用語も登場しており、こちらには道籟泰三によって「破壊的な蠢き」という訳語があてられている。
- (12) フェダーンは、シュピールラインの“Destruktionstrieb”はルートヴィヒ・クラークスの“Selbsthingebungstrieb”(自己放棄欲動)と同一のものであると指摘している。クラークスの概念についてはそれに関する著作(Schaber, 1939)を入手できず、具体的な内容の確認ができなかった。
- (13) この引用部分は「自我とエス」(Freud, 1932: 270)からのものである。
- (14) この論文「羨望と感謝」は一九五七年に発表された。
- (15) Klein(1948, 1950, 1952a, 1952b, 1975b, 1975c, 1958)を参照。
- (16) この論文「幼児の情緒生活についての二、三の理論的結論」は一九五二年に発表された。
- (17) 一九三四年にグラバーはクラインの娘であるメリッタ・シュミデバークの精神分析を開始している。皮肉にもこの二人は後にアンナ・フロイトと並んでクラインを批判する急先鋒となった(Melanie Klein Trust, n.d.-b)。